



世界「～Verden」

ゆうすけ

絶望と言う名の希望

天の血を引く一族が神の名の元に納める国、マハラード帝国。

その西の外れ、隣国アルガス共和国との国境に、その頂を決して溶ける事のない雪で飾った、小高く険しい山脈がある。

その姿から”世界の壁”と呼ばれるアナマ連峰である。

そのアナマ連峰の麓、深い森に抱かれた小さな農村がある。

その名を”アナマ村”と言う。

アナマ村は古くから神が住まうと言われるアナマ連峰を守る山守り達の集落で、マハラードの統一戦争により、世界神が信じられるようになり、独特な宗教的な山守りの習慣が薄れた今でも、マハラード帝国の中より孤立している。

それは宗教的、社会的な意味ではなく、深い森と山に囲まれた交通の便の悪さだった。

したがって、近代化が進むマハラード帝国の中に置いても珍しく、アナマ村は発展から乗り遅れ、その生活も”古典的”なものだった。

ようやく眠りから覚めた小鳥たちが、一匹、二匹と徐々にさえずりを始める頃。

東の空が僅かながら赤みを帯び始めた頃。

まだ、肉眼でハッキリ見えるほど星々が瞬いて、満ちかけた月が沈みかける頃。

一般的にそれは夜明け前と言われてもおかしくは無い時間にアナマ村の朝は始まる。

農村だからと言うだけではなく、発電所が無くエネルギーに不自由なこの村は、各家が所有する自家発電機によって電力をまかなっている為、経済的な理由からアナマ村の夜は速く、その分朝が早いというわけだ。

まばらに並ぶ、かやぶき屋根の農家の家が、屋根に空いた排煙口から朝飯を作る白い煙を登らせる中、村の一番奥に煉瓦造りの建物があつた。

統一戦争後に建てられた世界神をあがめる教会がそれだ。

ただ、煉瓦造りというだけで、朝の速さは他の家と変わらず、その立派な煙突からは白い煙がモクモクと上がっていた。

教会の聖堂の奥の扉の向こうに、この教会の神父とその家族が住まう住居がある。

神聖な黒衣を身に纏った黒髪の高背の神父と、寝ぼけ眼を擦る栗色の髪の小柄な少年の座る食卓に、神父と同じ色の長い髪の少女が、ブレッドとベーコンとスクランブルエッグを乗せたお皿を運んだ。

そして、少女が自らの食事を運び食卓へと座ると、神父は2人の少年少女の顔を見渡し、手を合わせ朝の祈りが始まった。

「愛する創造主なる世界神よ

わたしたちは世界神がこの地上を創造したように、

その聖なる名が永遠に称えられる地上天国を創造します

わたしたちは、聖なる意思を天で行うように、地上においても行います

地上での世界神の子であるわたしたちが、

この地で必要なものすべてを創造できるようにご援助ください

あなたがわたしたちを判断しないように、わたしたちも一切何も判断しません

虚偽混沌の遊戯に終末をもたらし、世界神の真実に今帰ります

とこしえに栄える地上天国で、あなたとわたしたちは永遠に一つです

初めの日からそうであったように

私と、私の娘ユツルと、同居人リュウトに世界神のご加護が御座いますように

ここに祈ります」

神父が胸元で印を切ると、黒髪の少女ユツルと、栗色の髪の少年リュウトも続いて印を切った

。

「では、頂きましょう」

神父がそう言うと同時に、リュウトはテーブルの上に置かれた、リモコンでTVの電源を入れた。

ブンっという音と共に、真っ黒だったTVの画面に、ノイズ混じりの画像が流れた。

マハラード帝国と、その外れアナマ村を繋ぐ唯一のものは、TVから流れる情報のみだった。

だから、TVが高価なものでも、電力に不自由であろうとも、アナマ村では各家庭に一台必ずTVがあり、毎朝かかさずニュースを見るのであった。

「ねえ、リュウト。

今日のスクランブルエッグはどう？」

ユツルがTVに食いつきながら、食事を口に運ぶリュウトを眺めながら言う。

「え、ああ、いいんじゃないの？」

だが、リュウトは心そこにあらずと言った感じで、とてもスクランブルエッグの味を気にしているようには思えなかった。

「もう、リュウトったら、何時もボケてるんだから……。

折角、リュウトが半熟が良いって言ってたから、半熟に出来るように頑張ったのに……」

ユツルの表情がリュウトを見つめながら陰った事など、当の本人は知る由もなくTVに見入っていた。

決してリュウトはボケている訳ではなかった。

TVの中に広がる”外の世界”に夢中になっているのだ。

アナマ村の朝が始まる頃、国営放送局の帝都通信放送では、放送開始直後のニュースを放送する時間だった。

朝一番のニュースは各地で奮発するテロリズムと、テロリスト相手に戦争を繰り広げる帝国軍の話題だ。

戦争に次ぐ戦争で、遂には宗教すら統一してしまったマハラード帝国は、諸国との摩擦が強く、ここに来てその問題が表面化してきたのだ。

何処の何地域で何々部隊の人が何人死亡し、死傷者の名前を挙げては冥福を祈る。

あまり良いニュースとは言えないが、それでも閉ざされた村に澄むリュウトにとっては新鮮なものに映っていた。

変わる代わる様々なニュースが流れ、リュウトが仕事に出る時間を迎えようとしていた。

TVの画面の隅に表示される時刻により、リュウトはそのことに気付きながらも、見て見ぬ振りをしようとしていた。

誰も時が過ぎることに気付かず、このまま黙っていれば、もしかしたらあの怠い仕事に出なくても良いかも知れないと思ったからだ。

だが、その甘い考えはすぐに打ち消される。

「リュウト、そろそろお勤めに出る時間ですよ」

リュウトのその気持ちを知ってか、知らずか神父が仕事に出ることを促したのだ。

「わかってるよ、おっちゃん・・・」

リュウトは吐き捨てるように言うと、食器を持ってキッチンに行き、既に食器を洗い始めているユツルに渡す。

そのまま立ち去ろうとするリュウトをユツルが引き留める。

「次に薪をケイ口の街に卸しに行くのは土曜日だったよね。

土曜日は学校休みだから、私も付いて行っていいかな？」

何処か恐る恐る言うようなユツルの口調。

答えは勢いよく跳ね返ってきた。

「ああ、良いよ！」

リュウトがそう言った時の目の輝きを、ユツルは見逃さなかった。

その瞬間、ユツルの気持ちは満たされていた。

「行ってきます！」

リュウトは自室にかけてある藁の肩掛けを羽織る教会を出て、教会の裏にある薪小屋に置いてあるかごを背負うと、一人、村を囲う深い森の中へと向かった。

程良く乾燥した天然の枯れ枝を拾いながら、ひんやりとした空気に包まれた森の中を小柄な少年は行く。

深く・・・。

深く・・・。

森の奥深くに身を投じて行く。

単調な作業は時間の感覚を麻痺させ、どれだけの時が流れたのか、どれだけの距離を歩いたのか、すでに解らなくなっていた。

ささささと音を立てながら吹き抜ける風が、リュウトの栗色の髪と草木をなびかせる。

リュウトはなびく前髪を押さえながら、木漏れ日が差し込む空をまぶしそうに眺めた。

すでに日は完全に昇り、太陽の位置と腹の空き具合から正午前だということが解る。

リュウトは薪売りをして一応の生計を得ている。

今年、中学を卒業したが、アナマ村には高校が無く、孤児で居候の身であるリュウトが都会にある高校に進学するとい望みを言えるわけもなく、進路の定まらない所を神父の薦めで薪売りをするようになった。

本来、薪売りと言うのは森林を伐採し、それを加工して燃料として売るのが一般的だが、例え

それが植物であろうとも、必要以上の殺生を好まない神父は、リュウトにそれを許さなかった。
だから、ただひたすら枯れ枝を拾うのみ。

そして、一週間に一度ほど、それを隣町・・・、と言っても三時間ほど三輪自動車を走らせた所にある砂漠の入り口の街、ケイロまで売りに行くのだ。

森林の生い茂ることのないケイロでは薪の需要は高く、さらに乾燥した枯れ木のためのリュウトの薪は特に上質で、より高度な火を求める職人に人気で、より高値で取引されている。

そして、得たお金でケイロの街で買い物を楽しむことが、リュウトの唯一の楽しみだった。

そんな楽しみが唯一の救いとは言え、若く、好奇心旺盛なリュウトにとって、この仕事は退屈以外の何者でもなかった。

毎日繰り返される、上とも下ともつかないほど、ゆったりと流れるこの森での時間の中で、リュウトは夢想する。

答えのない自問自答をしたり、今とは違う自分の姿を繰り返し夢見る。

リュウトの心に住まうモノ、それは外界への憧れであった。

他の同年代の村の少年達はどうだか知らないが、週に一回でも街へと足を延ばすリュウトは、外の世界の魅力を直に知っており、村での退屈な生活に満足することが出来なくなっていた。

こんな退屈な仕事だって、気が付くと日は昇り、また沈んでいく。

あっという間にまた一日、一日と時が過ぎていく。

このまま永遠に何も変わることなく、平凡に一生を終える人生に何の意味があるのかと何時も思っていた。

もっと大きな世界を求めて、何時かこの村を飛び出して旅に出たい。

それがリュウトの夢だった。

だが、何かを得るためには何かを捨てなければならない。

そう、今の生活に心残りが無いとも言えない。

親代わりである神父に、地に足を着けて生きるその先に幸せはある、生半可な気持ちで己に見合わぬ事をして身も滅ぼすだけだ、といつも言われていた。

その言葉はリュウトがちっぽけな人間であることを諭すようで無性に反感を覚えた。

俺は違う！

俺は世界にむけて羽ばたけるほど大きな男なんだ！！

そう自分に言い聞かせても、その言葉がリュウトに重くのしかかり、旅に出たいという自分の気持ちを神父に伝えられない原因にもなった。

言えれば間違いなく反対されると思っていたし、もし、旅に出て失敗して、ちっぽけな自分を痛感することが怖かった。

リュウトには今の生活を捨ててまで、新世界に出る勇気は無かったのだ。

そして、捨てきれない強い思いは、有り余る時の中で屈折していく。

何時しかリュウトの脳裏を駆けめぐりようになった幻想・・・。

それは決して望んではならぬものだった・・・。

そして、この日、その願いは叶うことになる。

絶望という名の希望。

アナマ村にその到来を知らせる狼煙が上がる。

それは少年が心の奥底で抱いていた夢、そのものだった。

正確な歴史が残されていないほどの昔から、絶えず彼らの神々の住まうアナマ連峰を守り続けてきた山守りの村、アナマ村。

その気が遠くなるほどの長い歴史が今、終末を迎えようとしていた。

農夫の一人が、村の入り口付近で立ち上る火柱を目撃したのが、終末の始まりだった。

誰もが何時もと変わらぬ畑仕事に勤しむ平和な農村に、突然爆音が響き渡り硝煙が立ちこめた

。あまりに唐突な事態が起きると、人はそれを理解できないと言うが、唯一直感できるものがあるとすれば、それは・・・。

死への恐怖。

それはどんな動物も持ち合わせる最も原始的な感情であり、進化と共に知恵を身につけた人間にとって最も恐れるモノだった。

平和な農村の至る所から悲鳴が響き渡る。

自分の村に何が起きたか解らぬまま、逃げまどう人々・・・。

だが、全てを飲み込むように燃え広がる炎は、一人のまた一人と村人達を飲み込んで死に至らしめていく。

まるで、己が意識を持っているかのように・・・。

爆音と、悲鳴・・・。

炎と硝煙・・・。

そして、死と恐怖に満ちた小さな村に甲高い笑い声が響く。

それはまるで、虫を殺しては喜ぶ子供のような残酷な笑い声。

平和だった村を一瞬にして恐怖のどん底に陥れ、家を、畑を、人々を焼き尽くす業火の中に浮かぶ細身の影。

この燃えさかる炎と同じ色、まるで血のような赤い髪、鷹の紋章が刻まれた赤い甲冑、赤い剣を手にした若く美しい男だった。

右目はひどい傷跡を残し潰れ、残った左目の真っ赤な瞳に狂気の色を浮かべ、口元は狂気にゆがんでいた。

その姿、まさに魔人と呼ぶに相応しい。

突然、現れたその男によってアナマ村は全てを破壊されようとしていた。

男がおもむろに剣を一振りすると、その身に纏った魔力により剣から炎が迸り、全てを燃やし尽くしていった。

転倒し逃げ遅れた女子供はすぐには殺さず、一本一本手足を切断しながらいたぶり殺し、その行く道の建物は全て燃やされていく。

なんとか、業火と殺戮の中を生き延びた女子供は村の一番奥にある教会に逃げ込み、男達は農具を手には隻眼の男に立ち向かった。

だが、男達のどんな攻撃も隻眼の男の前には歯が立たず、ある者は触れるより先に男の纏った

高温の魔力の前に一瞬にして灰と化し、またある者は男の手にした獲物により無惨にも八つ裂きにされ、目玉をえぐられ動脈を切られ、暗闇の中で狂気に満ちて死んでいった。

忌々しい程の魔力を持った隻眼の男の前には、村の男達を消し去ることなど赤子の手をひねるよりも容易いことだった。

自分たちの力など叶うはずがないと初めから知っていた。

一瞬にして消えてしまう命だったとしても、男達は逃げ出すことは出来なかった。

自分達の村を、家族を守る為に。

何も無い村なのかもしれない。

何の変哲のない毎日が繰り返されるかもしれない。

それでも、一日の仕事を終え帰ってくると、妻と子供が暖かく迎えてくれる。

それだけで男達は幸せだった。

それだけが男達の幸せだった。

それだけが男達の全てだった。

なのに突然やって来たこの男は、笑いながらいとも簡単にその全てを奪い、破壊した。

自分たちの大切なモノを守るためにはこの男を殺すほか無い。

殺ス！

殺ス！

殺ス！

今まで殺意など抱いたことの無いような男達の汚れ無き殺意も、たった一人の男の殺意にはかなくもうち消された。

殺してやるよ！

男達の終わりは一瞬だった。

もはや人知の域を超えた隻眼の男の動きをとらえられる者はおらず、刹那のうちに全ては切り裂かれ、後にはかつて人間だったものの肉片が大量に残っただけだった。

隻眼の男は残った左目を狂気に光らせながら、村の奥にたたずむ教会を見据えた。

その口元にまたも狂気の手が浮かぶ。

教会の中には神に祈る神父と、その娘のユツル。

そして、一家の主を失い残された家族達がそこにいた。

残った女子供達はそれが無駄だと解っていても、自らの身を守ろうと総掛かりで教会の重い木の扉を押さえ込んでいた。

武術や魔術に精通した者は、相手の気配を感じ取り、相手の動きを読むことが出来ると言うが、そんなものとは無縁の村人達でさえ、隻眼の男のまがまがしい魔力はハッキリと感じ取れた。

男が近づいてくる度、体中に悪寒が走り、吐き気を催す。

来る。

また一步。

また一步・・・。

来た・・・！

そう思ったときにはすでに、扉は男の魔力により吹き飛び、その場にいた村人達は微塵と化した。

ユツルの足下に殺された女の首が転がり込んだ。

その顔は恐怖に満ちて苦痛の表情で事切れていた。

「きゃ————っ！！」

教会にユツルの悲鳴が響いた。

「ようやく探し求めていたものに辿りついた・・・」

扉の前に起つ隻眼の男は少女、ユツルの姿を見据えた。

直感的にこの男が自分を狙っているものと理解した。

その理由なんて解らない。

でも、怖くて、怖くてたまらなかった。

神父はそんなユツルをそっと自分の背中に隠す。

ギュッと神父の服の袖を掴むと僅かながら恐怖が安らぐ気がした。

父親である神父の拾い背中が何よりも愛おしく、そして頼らしく思えた。

男が一步一步神父へと近づいていく。

神父の顔をじっとりとした汗が伝う。

神にその身を捧げ、神の慈愛によって全ての者を福音へ導く神父であっても、彼のその行為を容認することなど出来なかった。

神父の前に一人の人間であり、守るべき者のために戦う一人の父親であった。

神父が口の中で福音の言葉を唱えると、村中に転がった死体から魂の光が立ち上り天へと昇っていく。

それが神父として村人に出来るせめてものことだった。

「大丈夫・・・。

もう泣かなくて良い。

おまえは絶対私が守る・・・！！！」

そう娘の頭を撫でると、神父はかつて見せたことのない怒りをあらわにした。

そして、今まで自分の中に押さえ続けてきた破壊の衝動、魔力を解放する。

神父を中心にまぶしい光が広がる。

それと同時に衝撃波が広がった。

ドン！

ビリビリとしびれるような感覚がユツルの肌に走った。

瞬間、かつて見たこともないような父の姿に恐怖を感じもしたが、それが何より頼りしかった

。

「例えタブーである殺生を犯しても！！」

神父は魔力を両の拳に収束させると、間髪入れず隻眼の男を激しく殴りつける。

殴る！！

殴る！！！！

殴る！！！！

殴るたびに魔力が弾け、激しい音と共に二人の姿は光に包まれる。

やがて、その衝撃により床や壁の石が砕け、砂煙が立ち上がり、収まった頃には神父の荒い息だけが響いていた。

「弱き者が俺の邪魔をするな・・・！」

砂煙の中から隻眼の男の腕が現れ、神父の顔を鷲掴みにすると、圧倒的な力でそのまま何度も壁に叩き付けた。

神父は魔力を防御に使いダメージを防ごうとするが、男の攻撃が神父の魔力防御の限界を超え、ダメージは蓄積され骨は砕け内臓は損傷し血反吐を吐く。

「ぐはっ！！！」

「もう止めて！！ お父さんを助けてえ！！！！」

ユツルは泣き叫んだ。

父と男の力の差を、間近に迫る父の敗北を知ったからだ。

「五月蠅いっ！！」

男の異様に甲高い声が聖堂内に響き渡る。

隻眼の男が片目でユツルを睨むと衝撃波が発生し、ユツルの小さな体は軽くはじき飛ばされ壁に激突して意識を失う。

「止めろおっ！！ ユツルには手を出すなあ————！！！！」

その刹那、神父の体が光りに包まれる。

自分はどうなっても良い！！

ユツルさえ助かりさえすればっ！！！！

自分の命をくれても良い！！！！

神よ！！ 悪魔と対峙するだけの力をっ！！！！

命を削り持てる全ての魔力を解放して男を突き放すと、そのまま男に向かって魔力の光弾を続けて放つ。

バシュッ！！

バシュッ！！

バシュッ！！

光弾が弾けずさまじい光が教会の中を包む。

その爆風によって神父の指を数本すっ飛ばし、左耳の鼓膜が破れる。

指から、口から、耳から血が流れ、体中が傷つき、その痛みは気を失うほどのものだったが、痛みなど神父にとってはどうでも良いことだった。

ただ、男を殺し、娘を助けられればそれで良かった。

だが・・・。

ザシュ！

砂煙の中から男の赤い剣が現れ、神父の体を両断した。

神父は上半身と下半身を分断され、おびただしい血を吹きながらその場に倒れた。

どさっ・・・。

乾いた音が教会に響く。

男は崩れ去った神父の首を掴み、教会の壁に立て付けられた十字架に向かって叩き付ける。

そして神父の上半身は十字架にめり込んだ。

「力がなければそのアイも守れなどしない。

なのに自分の弱さを棚に上げ、口だけのアイを語るキサマら偽善者たちを見ると反吐が出る！

！

おまえら力無き者は生きる価値すらないんだよ！！

自らの力のなさを呪いながら朽ちるがいい！！！」

男は言い捨てると気を失ったユツルの長い黒髪を掴むとそのまま持ち上げた。

「そして力こそ全て！

新たなる力を得るためのカギを今手に入れたぞ！」

その日、全てが無に帰した村の中、男の狂気に満ちた甲高い笑い声が高々と響いた。

さよなら、俺の帰るところ

風が吹くと村のあちこちから立ち上る煙が一斉に流れていく。

風が煤と死臭を運び、容赦なく少年に吹き付ける。

煤で汚れた少年の栗色の髪はなびき、熱を帯びた風に涙がはためいた。

村の方角から立ち上る硝煙に気が付いて、リュウトが走り帰ってきたときにはすでに全て破壊し尽くされた後だった。

辺り一面を覆い尽くすがれきの山と、元々村人だったものの肉と血の海。

それはまさに地獄にふさわしい風景だった。

見てはいけない……。

見てはいけない……！！

見てはいけない……！！！！

全てにピントを合わせぬよう意識するが、意識すれば意識するほどそれは目に飛び込んでくる。

顔半分焼きただれ、両手足を肢体を分断された出来損ないの壊れた人形のような死体。

そのドロドロに溶けた顔はリュウトと教室を同じくした同級生の顔だった。

もう何も映ることのない残った片目がリュウトの目を見据えていた。

「うぎあああああああああつ！！！！」

その悲鳴が自分の口から出ているものだと気づかずに、少年は黒く染まった空に叫んだ。

喉を咽せ返せる灰と、立ちこめる死臭にリュウトは吐き気を催す。

原型をとどめない肉塊の上に少年の内容物が被さった。

ジットリとした汗が少年の小さい体全身からにじみ出る。

気持ち悪い……。

もう、何も戻すものがないのに嗚咽を続けた。

苦しくて、苦しくて仕方なかった。

助けて……。

助けて……。

助けて……。

おっちゃん！！ ユツル！！

誰でも良いから助けて！！

突然村をおそった悲劇に少年の脆い心は、何が起きたかなど理解できずに、現実を受け止めることが出来ずに、ありもしない助けを追い求めるだけだった。

助けを求める気持ちからか、むせ返るような煙と吐き気を催す死臭にさえなまれながらも、少年は操られるようにただまっすぐと教会へと向かう。

教会に行けば神父が助けてくれる。

現実を否定して、一心不乱にそう思いこみたかった。

教会は先ほどまでの地獄絵図とは一転して夕日をもたらす逆光に包まれ神々しささえ感じた。

そのあまりの神々しさにリュウトは安堵感さえ感じ、文字通り教会に駆け込んだ。

そこで見たものは古くからの神話に出てくる十字架に張り付けられた聖人の姿だった。

「神様・・・？」

だがそれは聖人でも神でもなく、リュウトの悪夢そのものだった。

「あああああああああああああつ！！！！！」

声にならない悲鳴を上げた。

自分の親代わりである神父が上半身と下半身を分断され、十字架に張り付けられていたからだ

。

言葉を失い腰を抜かすとリュウトのすぐ隣には神父の下半身がたくさんの肉片と血に埋もれて転がっていた。

気を失いそうになったとき、声が聞こえた。

「リ、リュウト・・・。

そこにいるの・・・か？」

「お、おっちゃん・・・?!」

涙で神父の顔はほとんど見えなかったが、その声は間違いなく神父のものだった。

だが、強靱な精神力でかろうじて生きているというだけで、その命は尽きようとしているのは誰の目から見ても明らかだった。

「村で生き残ったのはユツルとリュウト・・・。

お前だけだ・・・ぐばっ！！！」

大量の血を吐く神父。

リュウトは思わず神父の手を握った。

その手にはほとんど指が残っていなかった。

もう、死んでしまう。

先ほどの同級生の死体と神父の姿が重なり、その先に待ち受けるものが怖くてたまらなかった

。

「いいから、もうしゃべるなよ！！」

嗚咽混じりのその声はほとんど声になっていなかった。

「だまって・・・、黙って聞くんだ・・・！」

もはや命が尽きようとしている私の敵を討とうなど、馬鹿な考えはするな・・・ぐふっ！！」

大量に吐血しリュウトの手の上にかかる。

その血は手が焼けるように熱く感じた。

「お前にはっ！！

お前にはまだ未来があるんだ！！

大切な未来を過去の怒りや悲しみのために費やすな・・・！！

そこからは決して何も生まれはしない！

私のようにその身を滅ぼすだけっ・・・！！」

痛みと苦しみに耐えながら神父は一言、一言の言葉に残る全ての力を捧げる。

気を抜けばもう自分を動かすものは何もない。

何もない永遠の無だけが待っている。

だが、その前にっ・・・！！

その前に神父はリュウトに伝えなければならない言葉があるっ！！

それは心から心へと、新しい命へと紡いでいくこと。

神父自身が生きたという証拠を世に残すこと。

ただそれだけが力となり、死を迎えた神父を突き動かすのだった。

リュウトはその言葉を一言一言胸に焼き付けようと大きくうなづく。

「お前を縛るものはもう何もない。

過去を振り返らずに自分の道を探して歩むんだ。

そう、お前が望んだように・・・」

「！！」

おっちゃんは俺が旅に出たいと思っている事を知ってたんだ・・・。

知ってて本当は旅に出ることを許してくれていたんだ・・・。

なのに、なのに俺は勝手に反対されると思いこんで諦めていた・・・。

おっちゃんなんて居なくなってしまうえば良いと思ったこともあった・・・！！

おっちゃんはこんなにも俺のことを考えていてくれたのになっ・・・！！

ちくしょう！！

ちくしょうっ！！！！

こぼれる涙を堪えて噛み締める。

「一つの終わりは、一つの始まり・・・。

絶望もまた希望の始まり・・・。

そう、これはお前が自分の道を歩みだすための一つの希望・・・。

悲しみにくれず絶対に幸せをその手に掴むんだ・・・！！

我が息子よっ・・・！！」

握っていた手が徐々に冷たくなるのが解った。

息子なんて呼ぶなよ・・・。

リュウトが心の中でそうつぶやくと止めどなく涙が流れた。

走馬燈のように神父との思い出が脳裏を駆けめぐる。

早くに両親を亡くした俺にとってはおっちゃんは親代わりだったんだ。

赤の他人であるのにも関わらず、偽善的な態度で俺の親になろうとするおっちゃんが無性に腹が立って・・・、事あることに反抗していたんだ。

でも本当はそんなおっちゃんの優しさが嬉しくて・・・、嬉しくてたまらないから、それを認めたくないからうざったく思っていただけなんだ・・・！！！！

なんて、俺は馬鹿でガキだったんだよっ！！！！！！

本当は好きだったのに、今さらその気持ちに気づいても、伝えたくてももう伝えることは出来ない・・・。

止めどなく涙がこぼれる。

悔しくて、悲しくて、たまらなかった。

何で死ななきゃならなかったんだよっ！！

大好きな、大好きな俺の親父だったのにつ！！

「父さあ——————ん！！」

この日、始めてリュウトは神父を父と呼んだ。

だが、父と呼びたくても二度と呼ぶことは出来ない。

目からは自然に涙がこぼれ、その場に泣き崩れた。

出来ることなら夢であって欲しい。

だが、死臭と硝煙、肌を焼くような余熱がそれが現実だと言うことを物語っていた。

もう、何処にも戻れない・・・。

さよなら、俺の帰るところ・・・。

少年は旅立つ

その夜更け過ぎ。

かつて村であった場所は瓦礫に囲まれた墓場と変わっていた。

かつての教会の十字架は月明かりに照らされ、

「故郷の墓」

と刻まれた墓石となっていた。

村中に四散した肉片は全てその墓石の下へと埋葬された。

一人の少年の手によって。

少年、リュウトはその絶望の余韻と、たった一人で村人全員を埋葬した疲れで放心し、墓石の前で立ちつくしていた。

そこに黒いローブを纏った一人の男が墓石の向こうの森の木陰から姿を現した。

リュウトはその男を目で追った。

そして男はリュウトの前で立ち止まった。

男の表情は深く被ったローブで見えない。

無言のまま二人は対峙する。

始めにその沈黙を破ったのはリュウトだった。

「お前が父さんをっ、村をこんなにしたのかっ?!」

目が血走り男をにらみつける。

そして、続いて男が沈黙を破る。

「僕は君の敵じゃない・・・」

今にもかすれて消えてしまいそうな弱々しい声には優しさがあった。

ローブから覗く白い口元に優しくどこか寂しげな笑みを浮かべていた。

「そんなこと言っても信用できるか!!」

こんな時に、こんな時間にこの村に立ち入った以上、無関係なはずなどない。

身構えていつでも殴れる体制を作った。

リュウトにはこれと言った武器もなく、もし、本当にこの男が村を滅ぼした男なら、リュウトの力では到底叶うはずもない。

だが、村を滅ぼしたかも知れない男をみすみす見過ごすことは出来なかった。

「信用してもらえないならば、君にとって良いことを教えよう」

リュウトはごくっとうを飲む。

「君と親しい少女、ユツルが何処にいるか知っているかい？」

「えっ?!」

リュウトはユツルは逃げ延びたものと思いこんでいただけに意外な言葉だった。

「その少女は反帝国軍に捕らえられている」

「そんなことはっ・・・」

そんなことは父さんは言っていなかったぞ!!

「一体どういうことなんだよ！！」

リュウトはローブの男の胸ぐらを掴んだ。

「惨事後、神父の元を訪れた僕に少女の救出を頼み、君にはそのことを伏せていたのさ・・・」

「何故だ？！」

俺に、俺にやらしてくれればいいのにつ！！」

リュウトは悔しさのあまり男の胸ぐらを放し、樹に拳を叩き付けた。

ざあん！！

バサバサ、と木が揺れ葉が宙を舞って散った。

「君の力で反帝国軍から少女を救えるのか？」

「くそっ・・・！」

リュウトは自分の無力さを思い知り下にうつむいた。

「神父は君を危険に巻き込みたくなかったんだ・・・。

だから他人の、こんな得体の知れない僕に娘を託した・・・。

それは、本当に君のことを愛していたから・・・」

「くっ・・・」

もう、泣かないと決めたのに、他人の口から親の愛を知り、思わず涙がこぼれそうになるが必死に噛み締めた。

「でも、僕は君に少女を救って欲しいと思う」

男の意外な言葉にリュウトは驚きを隠せなかった。

「えっ、でも俺の力じゃ無理なんだろ？！」

「無理だと思っていたら、出来ることも出来ないよ・・・」

と男は笑みを浮かべた。

リュウトは旅に出ることを無理だと思いこんでいたことを思い出した。

「確かに今の君の力じゃ無理だけど・・・」

男はローブの裾に包まれたその細く白い二の腕をリュウトの方に突き出す。

「手を出して・・・」

多少警戒したがリュウトは男の指示にしたがい男に手を差し出す。

男が口の中で小さく印を唱えると、男の手の平から光の粒子が現れ、リュウトの身体を包むように宙を舞い、それはリュウトの手の平の上で収束すると剣の形を形作った。

刀身が長い両刃の大剣だった。

少し薄汚れてはいるが、銀色の不思議な輝きを秘めていた。

騎士剣のわりにはその剣の重量は軽く、まるでサーベルのように軽々扱えた。

「この剣は裁きの剣・・・。

今はただの剣だが、君が本当に必要な時に君を助けてくれる・・・」

「裁きの剣・・・」

リュウトは剣を一閃した。

月明かりのみが照らす闇に銀色の光が横一直線に走った。

男は南の方を指す。

「ここから東。

ケイ口の地下水脈道を越え、ヤゴン川を遡った先にある滝裏の洞窟に彼女は監禁されている……。

行ってやるがいい……」

彼の口元が優しくほころんだ。

「本当は敵なんだろう？

何故、こんなにするんだ……？」

「僕はかつて愛すべき人を失った。

だから君の悲しみは良くわかる。

僕は愛する人を失うのを防ぐことが出来なかったが、君にはまだ未来がある。

これからでも遅くはない。

愛する人を救うんだ……」

そういうと彼はローブをひるがえし再び闇が支配する森の向こうへと解けていった。

帰るところはなくなってしまったけど、まだ、俺と、ユツルがいる！！

兄妹のように育てられたくさんの時を共有してきたユツル。

かけがえのない存在。

もう誰も失いたくない！！！！

絶対に助け出して幸せになってみせる！！！！

あの男が敵であろうと味方であろうと信じるしかない！！！！

リュウトは拳を握りしめて立ち上がった。

月明かりが少年の横顔を照らす。

その両の手には神父の愛用した十字架のネックレスと大剣が握られ月明かりに輝いていた。

その面影はどこか大人びて見えた。

そして、少年は怒りと新たな希望に満ちながら村を後にする。

この日、少年の旅が始まった。

アルガス共和国とマハラード帝国を分かち、世界の壁と呼ばれるアナマ連峰。

その麓の深い森に抱かれたアナマ村が、この世から消滅してから一日の時が流れた。

まるで、そんな小さな事は大きな自分には関係ないと言うように、熱線が突き刺すように輝いていた太陽も、西に向かって傾き始めた頃には、重く黒い雲で陰り始めていた。

アナマ村の東に位置する砂漠の街ケイ口の地下水脈道を通り、地下水脈へと流れ込むヤゴン川を遡った滝の裏に、この空を覆う雲のような不気味な黒い穴がポッカリ空いていた。

その内部は複雑に入り込み、一度迷ったら元に戻ることはおろか、至る所に地下水が流れ、さらに凶暴な古代の魔物が巣く、先に進むことすら容易ではないその様は、まさに天然の要塞。

その洞窟の奥、地底湖を抱く大きな空洞に人為的な明かりが灯されていた。

燃えさかる炎を高く掲げた黒いローブを纏った魔術師達が地底湖を取り囲むように輪を作って立ち並び、低く唸るような不気味な呪文を声を合わせて唱える。

その身の毛もよだつような合唱は、まるで低周波のようにモワンモワンと低周波のように洞窟の中で反響していた。

そして、魔術師たちが取り囲む地底湖の中央に、天然の水晶を削って作られた十字架と、その上に脈動する無機物の臓物が浮かんでいた。

透き通った水面に、十字架にくくりつけられた細く柔らかな肢体が映し出される。

肌をさらした白い肢体に乱れからみつく滑らかな長い黒髪。

細い身体を十字架へとくくりつける両腕に打たれた銀の杭からは真っ赤な鮮血がにじみ、その足下から滴り落ちては、十字架を伝っては澄んだ水面を濁す。

身体の至る所にケーブルをくくりつけられ、それは時を待つように静かにドクンドクンと鐘を打つ機械の心臓に繋がっていた。

まるで美しさ故に地獄へと幽閉され、悪魔への慰めものとされる女神のようだ。

女と呼ぶにはまだ未発達な少女、その名はユツル。

滅ぼされたアナマ村の生き残りだった。

彼女を襲った容認できぬ悲劇、なおも身体を脈打つ痛み。

まだ、幼く、優しさと日溜まりに満ちた、彼女の柔らかい心は、虚無より残酷な現実の前に壊れた。

止めどなく涙を流し、涎をたらし、糞尿をまき散らし、全てが枯れ果てた時、まるでそれが彼女の命だったかのように、彼女の目から光が消えた。

それから先には何もない。

ただ、自分という形をした肉人形が朽ちるだけのこと。

もはや、哀しみさえ、身体を軋ませる痛みすらも感じない。

自分が自分と言えるものを失ったとき、彼女の目は何も写すことをしなくなったのだ。

意識を失いながらも、その顔には全く生気を感じられなかった。

皮肉にも生気を失ってもなお、その姿はまるで美しい人形のようなようだった。

無機質な美しい娘の人形が、無機質の心臓に繋がっている。

その光景は残酷であり、どこか滑稽でもあった。

その様子を眺め、胸に野望を脹らませては、不敵な笑みを浮かべる者が居た。

醜い傷を残して潰れた右目、燃えさかる炎のような赤い髪、その小柄な身を包む赤い甲冑、背中にくくりつけられた赤い剣。

地底湖に浮かんだボードの上に立つその者はまさに悪魔！！

その胸の内の思いはもはや野望と呼ぶに生ぬるい！！

クロス！！

クロス！！！！

クロス！！！！

黒く淀んだそれは殺意に他ならなかった。

「力の神話が今始まる！！！」

洞窟の中に子供のように高い男の声が響き渡った。

その瞬間、魔術師達の不気味な声は、ゴワンゴワンとうねりを上げるように五月蠅く鳴り響き、機械の臓物はドクンドクンと大きな音を立てて激しく脈打つ。

洞窟は地響きをし、その空洞は魔術師の発する闇の魔力で充満し、無機質の心臓は闇色の光を放っては、ありとあらゆる光を飲み込んでいく。

その中で・・・。

じんわり・・・。

じんわり・・・。

僅かながらユツルの身体を中心に光が生まれる。

闇の中で瞬くそれは、まるで夜空に輝く星のようだ。

この地獄に不釣り合いな神聖なその輝きは、その野望へ一歩近づいたことを感じさせる。

だが、喜び狂うだろう時にその男は、今までにないほどの殺意を抱いた。

見開かれた目はその言葉に出来ない殺意を表していた。

ブチっ！！

ブチブチっ！！！！

ブチブチブチブチっ！！！！！！！！

文字通り、音を立て頭の血管が切れ、額から血が噴き出すが、男の纏う高熱の魔力により蒸発して赤い蒸気になって立ち上る。

ヒンヤリとした空洞の空気は一気に汗が噴き出るくらい熱くなり、闇は男の放つ赤い魔力により打ち消された。

その”死線”の向けられる先、その空洞の入り口には鷹の紋章が刻まれた白銀の鎧と、同色の剣を手にしたたくましい中年の男が立っていた。

今まさにそこに急ぎ着いたと言った感じで、額にしたバンダナに汗が滲み、荒い息を整える間もなく隻眼の男に向かって叫ぶ。

「今すぐその儀式を止めるんだエグニマ！！！」

言われた瞬間、エグニマと呼ばれた隻眼の男の、微かな理性は消え去っていた。

「ラミネエーーーースう！！！！」

俺の邪魔をするなあーーーーっ！！！！」

次の瞬間、エグニマは炎の固まりとなり、まるで地面の上を滑るように駆け出すと、その死線の先にある物全てを灰塵と化した。

地底湖を囲む魔術師の何人かがその瞬間に消滅したが、それでも他の魔術師達は依然と呪文を唱えていた。

エグニマが、ラミネスと呼んだ白銀の装備を身に纏った男の首を掴むと、そのまま洞窟の岩盤へと叩き付ける。

がごおーーーーん！！

地響きが起き、パラパラと洞窟の天井から崩れた岩が落ちる。

じゅーーーーっ！！

その魔力により、隻眼の男が掴んだラミネスの首が焼け、白い煙を上げ生臭い匂いが漂った。

ラミネスは首に食い込んだ指を必死の力で引き剥がそうとするが、壮大な魔力を身に纏った男の力は尋常では無かった。

ラミネスは男の鳩尾に膝蹴りを入れるが、まるで硬い岩を蹴っているようで、全く効果はない。

もう一度、男がラミネスを岩盤に叩き付けると、ラミネスの身体は人型に岩盤へとめり込んだ。

ごがっ！！

肺が損傷を受け、ラミネスは血反吐を履く。

「な、何故、こんな非道な真似をするんだ？！」

息をするだけで意識が途切れそうになるほど痛く、そしてどうしようもないような吐き気にさいなまれながら、ラミネスは声を振り絞るように聞く。

「決まっているだろっ！！

力を得るためだよっ！！！！！！」

隻眼の男・・・エグニマはラミネスに向かって赤い剣を振り下ろす！

ぎよわっ！！

音を出しながら空気が引き裂かれ、炎の筋が残る。

ラミネスが引き裂かれそうになったその時、手にした白銀の剣で身構え何とかその太刀筋を防ぐが、迸った炎によりラミネスの額のバンダナが塵となった。

「お前にはそれを教えたはずだ！！！」

生きる意味をっ！！

力の使い道をっ！！

今まで反帝国軍において、帝国に虐げられた人たちを助ける為、お前はその力をふるってきたではないか！！

人を犠牲にし、それ以上の力を望んで何になる？！」

ラミネスの必死の言葉にエグニマは一度剣を引いてはその口元を不敵に歪ませる。

だが、その目は決して笑って等いない。

「確かにお前には大切なことを教えられたよ。

お前に言われるまま戦かう日々はまさに確信の日々だった！！

簡単にゴミになっていく帝国兵と戦うたびに、他力本願に生きている無力な奴をこの目にする度、俺は腸が煮えかえりそうになる・・・！！！！

殺したくて、殺したくてたまらなくなる！！！！

そして、確信する！！！！

力無き者は生きる価値がない！！

何も生み出さず、ただ破壊することしか出来ない俺は、力のみがその身を証明してくれるというのを！！

今は感謝したいぐらいだ！！

その事を確信させてくれたお前になっ！！！！！！」

エグニマの高笑いが洞窟に響く。

甲高いエグニマの声と、低い魔術師達の呪文が協調する。

ラミネスは剣を杖代わりに立ち上がり、エグニマの目を直視する。

ドロドロとした燃えさかるような殺意の光に、百戦錬磨のラミネスであろうとも飲み込まれそうになる。

そして、吐き捨てるように言う。

「力の妄執に囚われたかわいそうな子だ・・・！！」

「何も解っちゃいないその甘さに反吐が出るって言うんだよっ！！」

その刹那、ラミネスに向かい打ち込まれる斬撃！！

だが、そのまま切り捨てられるラミネスではない。

斬撃を剣で受け流し、そのまま攻撃に転じるが、その斬撃はエグニマに受け流される。

そして激しく繰り替えされる攻防！！

人の戦いの次元を越えたその戦いは、もはや肉眼で捕らえられるものではなく、ただ激しく互いの魔力を帯びた火花が散るのが見えるだけだった。

「出来ればこの手で救ってやりたかったが、それが出来ないのならば仕方がないっ・・・！！！！」

エグニマはその口元を狂喜に歪ませる。

「馬鹿で甘いお前も解ったようだな！！

タダひとつ俺を救えるモノがあるとすればっ！！！！！！！！」

ますますスピードを増すエグニマの斬撃！！！！

「くっ！！」

そのあまりの速さと切り込みの強さにラミネスは押され、反撃をすることはおろか受け流す事すら難しくなる。

エグニマを取り巻く高熱の魔力は炎の嵐となり、全てを飲み込み出す！！

そして、臨界！！！！

一瞬のことだったが、それはまるでスローモーションのようにラミネスの脳裏に映っていた。

手にした白銀の剣ははじき飛ばされ、炎を帯びながら岩盤に突き刺さり、とっさに身体を庇った左腕は燃え上がりながら切り裂かれ、そのまま眼前にその真っ赤な刀身が迫った！！

ブツリと視界が途切れると、その瞬間にラミネスの全てが終わった！

「それは力だ！！」

頭を真っ二つに割られた死肉は、その高熱により燃え上がり、後には骨すら残らなかった。

カランと言う音を立て、かつてラミネスの物であった白銀の鎧が、洞窟の岩で出来た地面へと転がった。

もう、エグニマの野望を止める者はいない。

そして、魔術師達の呪文はまるで悪魔の叫び声のような絶頂を迎え、水晶の十字架にくくりつけられたユツルの身体はハッキリと解るほど光を放ちながら瞬いていた。

「星よっ！！！！」

俺の望みを叶えよっ！！！！」

そして、光が全てを飲み込む。

それは光の柱となり洞窟の天井を透過し、頭上にそびえる山すら突き抜けて、深々と天に刺さった。

そして、世界は地鳴りと天鳴を伴い脈動した。

今、神話が動き出す。

アナマ山脈のほぼ中腹、マハラード帝国側へと下山する山道を一人の男が行く。

腰まで伸びた艶やかな金髪に、透き通った青い目、彫りの深い精悍な顔立ち、風に靡く赤いハチマキ、雨風に打たれボロボロになった革のマントの下から、牛革の服の上に装着した肩と胸だけを防御する金属の甲冑を覗かせ、腰には細身の長剣が納められたサヤと、麻の袋が下げられていた。

スネとつま先に金属板をくくりつけたブーツを履いた彼の足が、ゴツゴツとした岩肌が切り立った険しいアナマの山道を、不安定な足場を避けながら難なく下っていく。

その風貌と動きから熟練の旅人だという事が解る。

男は巨大な鋭利な刃物によって切り裂かれたような谷間にかかる吊り橋の中央を渡り切ったところで足を止めた。

空を見上げると、アナマ山の頂には黒い暗雲が立ちこめ、時折雲の中が光りゴロゴロと雷鳴が轟いていた。

よくある夕立ならば、旅慣れた男は気に止めはしない。

だが、男の直感はそれがただの夕立ではないことを理解していた。

まるで違う世界にでも迷い込んでしまったかのような違和感。

そして、ビリビリと背筋に走る凄まじい魔力。

通常、自然界でこれほどの魔力濃度が発生することはあり得なかった。

一体何が・・・？

そう思った瞬間、遠方の空に光の柱が突き刺さった。

世界が鼓動している！！

そう思わざるを得ないほど、地面が空気が世界を構成する全てが、ドクンドクンと早鐘を打つように振動していた。

ドクン！ ドクン！！

ドクン！ ドクン！！ ドクン！！！！ ドクン！！！！

それが徐々に高まり臨界を迎えたとき、ピシッと言う音と共に、男のいる谷の上空に光の亀裂が走った。

爆風に近い者が男を襲う。

とっさにマントを翻し、飛んでくる石から自分の身を守る。

そして、充満していた魔力は亀裂の前で収束して、光の球を形成していく。

目の前で何が起きているか、常識を越えた出来事を理解できなかったが、その胸は息苦しくなるように高鳴っていた。

それは男が自ら心の奥底に封じ込め、忘れていた感情だった。

男は目の前に現れた光の球に心を奪われ見とれていた。

それがまるで自分の愛する人のように、愛おしくて、愛おしくてしょうがなかった。

やがて、光の球が人の大きさぐらいになると、亀裂は塞がり天地鳴動は何事もなかったかのよ

うにぴたりと止まる。

そして、その光の球はまるで支える物がなくなったかのように落下し始める。

男はその瞬間、駆けだしていた。

足に全ての魔力を集中し、まるで投石機から打ち出される石のごとく、男の身体は加速する。

それを受け止めようと手を差し伸べるが、落下の速度に男の速度が間に合わず、光の球は吊り橋を突き破って、谷間へと落ちようとしていた。

もっと速く！

もっと速く！！

もっと速くっ！！！

男の思いに呼応するように、身体の中に無尽蔵の魔力が生まれ更に加速する！

バン！！ バン！！！！ バン！！！！

その瞬間、身体に衝撃が走る！！

それは音速の壁と呼ばれるものだった。

おびただしい速さで流れる景色とは裏腹に、男の目が捕らえるものは穏やかに時が流れていた

。

そして、光の球に手が届いたその瞬間、全ての時が止まった。

その時、光の球の中で男の見たものは・・・？！

「太陽・・・」

男がそう呟くと、その瞬間に時が動き出し、男はそれを抱いたまま谷底へと落下していった。

どかぁん！！

異様なまでの静寂に包まれた山中に大きな音が響く。

そして、谷底に叩き付けられ意識を失った男は、無意識のうちに腕の中にあるモノを抱きしめていた。

むにゅ！！

むにゅむにゅ！！

な、なんだこの柔らかい、いやむしろ気持ちの良い感触はっ！！！！

男がハッと意識を取り戻すと、その視界に飛び込んできたものはっ！！

ずきゅん！

ずきゅーん！！

ずきゅーん！！！！

男は目をつむり、はぁはぁと荒くなる息を整える。

こ、これは何かの間違いに違くないっ！！

そして、もう一度恐る恐る目を開けるとそこには、若い女性の裸体があった！！

そう、男は若い裸の女をその腕に抱いていたのだ！！

男は邪悪な蛇の髪を持つ魔女に睨まれたかのように石化した。

こ、これは夢なのかっ！！？

むしろ夢ならば醒めないで欲しい・・・！！

男はその白肌から目を背けるように上の方、彼女の顔を見た。

男の心に裸体を見たとき以上の衝撃が走った。

肩の辺りで切りそろえられた栗色の髪、幼さを残した柔らかい輪郭。

その顔は男の心に住まう少女と瓜二つだったから。

意識を失っていようとも伝わってくる彼女の暖かい雰囲気、よりその姿を重ねてしまう。

ドクン！

ドクン！

男の心は囚われ、その瞳には女の顔しか映してはいなかった。

そんなことはしてはいけない・・・！

そう思いながらも男の唇が、女の唇へと近づきつつあった。

男の瞳の中で徐々に大きくなっていく女の顔・・・。

後少し、後少し・・・！

だがその時・・・！！

「ぐおっ—————っ！！！」

山中に獣の咆吼が響きわたる。

それも一つや二つでは無かった。

アナム連峰に住む全ての獣が一斉に叫んでると言っても過言ではなかった。

男はハッと我に返る。

以前、とある村の夏祭りで、花火の音に驚き凶暴化した魔物達が一斉に村を襲った所を助けたことがあるが、今回は魔物が本能的に一番恐れる巨大な魔力が引き金だ。

これはヤバイ！！

そう思い、男は自分のマントを女に被せ走り出した。

男が立ち去った直後、男のいた場所に5、6体の大猿が谷の上からなだれ込むように落ちてきた。

うわっ、逃げて正解だった！！

あそこにいたら潰される所だった！

男はその様子を横目で見つつ、足を急がした。

そして、女を抱えて逃げる男を標的にし目を光らす大猿たち。

「ぐおっ—————っ！！！」

響く咆吼！

大猿たちは一丸となって、もの凄いスピードで男を追いかけてきた。

しかも、次から次へと様々な魔物が合流し、いつの間にかに大軍勢となり、まるで雪崩のようになって全てを飲み込みながら突進して来る。

「ひょえ—————っ！！！」

両手がふさがっているし、例えこいつらを倒したとしても、後から後から魔物が来るんじゃない！！

だが、男はデタラメに逃げているのではなく、一応の打開策があった。

吊り橋から落ちてショートカットしてしまったものの、この谷間は本来通る予定の下山ルート

。

そして、この先に山にかかせないある物がある事を知っていた。

それは！！

男の瞳に木で出来た山小屋が映る。

あの小屋に逃げ込めば助かるっ！！！！

一見あっという間に魔物の雪崩によって飲み込まれて壊れてしまいそうな建物だが、男には助かるという確信があった！

どどどどどどどど！！！！

地響きを立てながら迫り狂う魔物の軍勢！！

瞬く間に男のすぐ後に迫りつつあり、その背筋に魔物の死臭のような荒い息を感じる！！

足が空回りしそうになるほど、思いっきり地面を蹴り付け、片手を伸ばし山小屋の戸を引くと、その中へ女を抱いたまま転がり込み、間髪入れず立ち上がって戸を閉めると、小屋全体にビリビリとした衝撃が走った。

魔物達が小屋に到達するその寸前、小屋の周りをバリアのような薄い膜が覆い、魔物達は魔物達は小屋に手を触れる事が出来ずに弾かれた。

これこそが魔物の徘徊する山の中で人間が安心して休める最大の理由、山小屋に組み込まれた魔よけの結界だった。

小屋の周りだけを避けて魔物達の雪崩は山を下っていった。

「ふう、助かった・・・」

男は女の寝顔を見ると、ホッと胸を撫で下ろした。

目覚め

戦争・・・。

罪の意識が正当化され、互いの正義の名の下に、人々が互いに殺し合う最大の罪・・・。

虐殺や、火の手を逃れ、その場で命を長らえたとしても、その先に待つのは生き地獄だ。

むしろ、あの時死んでしまえば良かったと思えるような現実が続く。

仕事を得ることはおろか、食料を得ることすら難しく、栄養失調や、不衛生な環境の中で病気になって死んでいく。

人々は生きるために罪を犯し治安は悪くなり、殺し合いが耐えない。

戦争で直接死ぬ人間より、戦後の混乱での死者の方が多いと言われる。

そのまま経済活動が再開することなく、その後、永遠と混乱状態が続くこともある。

もし、混乱を生きながらえ、復興したとしても、悪魔のような殺戮兵器による後遺症は消えず、遺伝子の破壊により奇形児を生むことや、何代に涉っても後遺症が続く場合もある。

まさにそれはこの世の地獄である。

彼女の一家は辺境の地に住んでいたため戦火を逃れられ、裕福な家庭だったのでこれと言った地獄を知らずに育ってきた。

だが、そんな生活も長くは続かず、やっと読み書きが出来るようになった時には両親を病気で失い、それからは弟と二人で暮らすようになった。

それからどれだけの時間を幼い姉弟二人きりで過ごしてきたか解らない。

必要な物を市場に買いに行く時以外は家の外に出ず、親の居ない寂しさを違いに慰め合うように生きてきた。

そんなある日の事、彼女たちの家を一人の女が訪ねた。

各地に存在するスラムから、安住の地を求めて逃げ出してきた漂流者で、宿と食料を求めていた。

一晩の交流で幼い姉弟は女の見せる優しさに惹かれ、女の事を自分達の母親のように感じていた。

あっという間に一晩が過ぎ、彼女は旅立とうとする女を引き留め、自分たちと暮らして欲しいと望んだ。

それから三人の生活が始まった。

女は幼い姉弟の面倒をよく見て、姉弟も女に良くなついていた。

それは彼女にとってなにより幸せな時間だった。

女の本当の目的を知るまでは・・・。

ある日、目覚めると家の何処にも女の姿は無かった。

泣きながら何処を探しても見つからなかった。

隠してあった親の遺産も全て無くなっていた。

財産目当てに近づき、言葉たくみに姉弟を騙し、そして、裏切った・・・。

それから先はまさに地獄だった。

あっという間に食料も尽き、食料を手に入れようにも、今まで裕福に過ごしていた幼い姉弟に、地獄で生き延びる術も無く、飢えに苦しんだ。

先にその時が来たのはより幼く体力もない弟の方だった。

何時しか姉に救いを求める声すら出すことが出来なくなり、皮膚は乾ききって変色し、その腕も足も骨と皮だけになり、何も食べていないのにも関わらず、お腹だけはボコッと脹らんでいた。

豊かでフサフサだった栗色の髪は抜け、あの柔らかかった頬は見る影もなく、まるでナイフでえぐり取ったかのようにそげ落ち、輝きを失った目は落ち窪んだ眼窩の中で飛び出して見えた。

まるで魔物か、老人のようなあまりに変わり果てた姿。

そして、息をすることが出来なくなると、徐々に脈が弱くなり、その身体が冷たくなっていった。

「ああああ・・・」

悲しみに悲鳴を上げたくても、声が出ない・・・。

身体が乾ききって涙すら流すことが出来ない・・・。

自分たちを地獄に突き落とした女よりも、簡単に人を信じてしまった自分が、憎らしくて、憎らしくてたまらなかった。

そして、こんな戦争を引き起こした男が憎くてたまらなかった。

全てに混沌をもたらした、自らを世界神と名乗るその男を・・・！

許せない！！

許せない！！！

許せないっ！！！！

「うわあ————っ！！！」

彼女は叫び声を上げながら飛び起き、無意識のうちに目の前に映った人物を殴りつけていた。拳に感じるズッシリとした感触。

「うぎゃっ！！」

まるでカエルの潰れたような声に彼女は我に返った。

目の前にいるのは見知らぬ金髪の男。

周りを見渡せば見知らぬ木の小屋のベッドの中・・・。

「ここ何処？ あんた誰？」

そう言ったとき、胸にかかったかけ布団がずり落ち、胸がはだけ出された。

目の前にいる男の白い顔が真っ赤になった。

はっと気づき、自分の身体を見ると・・・。

「きゃ————っ！！！！

変態！！！！ 私に何をしたの！！？」

と彼女は布団で自分の胸を隠すと、男に向かって枕を投げつけた。

「いや、ちょっと！！！」

「言わなくて良いわよ！！！」

聞きたくなんて無いわっ！！！」

彼女は布団をかぶり泣き伏せる。

「うわぁ——ん！！ もうお嫁に行けなぁ——い！！！」

「そ、それはちがうぞ！！

俺は決してやましいことなんかしていない！！！」

しようとは思ったかもしれないがっ！！！」

あれは未遂に終わった！！！！」

「やっぱり変態！！！」

「し、しまったぁ！！ 余計な事を言ってしまったぁ！！！」

と、ともかく、違うんだ！！！」

俺は山で遭難？ していた君を助けて山小屋に連れてきただけだ！！

信じてくれ！！！」

彼女から布団から顔を出し、キッと男を睨み付ける。

「私に手を出したか出していないかは別として、何も無しに見ず知らずの私を助けるはずがない……！」

そう言う偽善ぶった奴が一番信用出来ない！！！」

男は苦笑した。

「別に偽善だと思われたって良いさ。

俺はただ君を助けたかったから、助けただけだからさ」

「なにそれ！？

よくわからない……」

「きっと、何時か解るさ」

なんなのよ、コイツ……！」

突然現れたワケの解らない男に対する不信感は募るばかりだった。

「あんた誰なのよ？」

「俺の名はユエグス……。」

世界中を旅をしながら、ちょっとした戦災支援活動をして回ってる。

まあ、君の言う偽善者さ。

君は？」

「わ、私？ えっと私は……」

???

「あれっ、私は誰??

何でだろ?!

どうしてだろう?!

自分のことが思い出せない……。」

自分の名前すら思い出せない?!」

「記憶喪失か……?」

ユエグスが呟いた。

彼が記憶喪失の者に会うのはこれが初めてでは無かった。

彼が旅をして来た世界中の戦地で、戦争による怪我や、悲惨な状況を直視した精神的な理由により、記憶を欠落させる者もいた。

彼女の場合、あんな登場の仕方をしているし、その両方かも知れないと思った。

「とにかく、冷静に君に思い出せる事を整理してみて」

女は目を瞑り、自分のことを思い出そうとするが、ほとんどのことがモヤガが掛かったように思い出せない。

だが、思い出そうとしていない事ばかり、明確に脳裏に浮かぶ……。

飢えで死んだ弟の死に顔……。

人を信じて裏切られ、弟を死に追いやってしまった自分への後悔……。

そして……。

女は荒くなる息を肩で落ち着いた。

「ただ一つ私に思い出せるものがあるとすれば、世界を壊滅させる戦争を起こした憎き男の名と、その男を殺すという使命だけ……。

その男の名前は、世界神……！」

彼女の瞳が殺意に光るのをユエグスは見逃さなかった。

彼女が殺意と悲しみに囚われていることが、とても悲しかった。

「確かに世界神の血を引く者と名乗り、各地で戦争を起こしている奴はいる……！」

この国の帝王、ミルザ・ウェー・マハラード4世だ。

「だけど、彼はまだ世界を壊滅させる程の戦争はしていないし、彼自身も”世界神”の”眷族”である”皇帝”を名乗っているだけで、直接”世界神”を名乗ってはいないよ」

ユエグスは声の声のトーンを低くして、自分を落ち着けるように言った。

「今はまだ、でしょ……？」

大戦争は遅かれ早かれ必ず起きる……。

その前に世界神を殺すのが私の使命……！」

「それって、予言……？」

それとも君自身、未来から来たの？」

「未来……。

覚えていないけど、そうかも知れない。

信じられない……？」

「いや、信じられるよ……」

ユエグスは彼女が現れた時の事を思い出す。

あれほどの魔力と、空間の亀裂……。

時間を超えて来たとしてもおかしくはない。

「とにかく、今は休んだ方が良く」

そう言うとユエグスは床に落ちた枕を彼女に手渡す。

そのユエグスの優しい目に彼女は無性に腹が立ち目を背けた。

「近寄らないでよ変態！！　　そういう偽善者的な態度がムカツクんだよ！！」

怒りを露わにする彼女の目をユエグスは見つめ、微笑んだ。

「君は優しい目をしてるんだね・・・」

ユエグスの思いもよらない言葉に彼女は不意を付かれ、思わず胸が高鳴った。

「な、何を言ってるのよ?!」

「前に君と同じような目をした子がいたんだ。

その子は優しい子だったから、同じ目をしている君も、本当は優しい子だと思う」

きっと、本心では人を信じたいのに、信じられないかわいそうな子なんだよね・・・。

ユエグスは彼女の本当の気持ちに触れたいと思った。

「ば、馬鹿じゃないの?!」

「どういう理論だか解らない！」

「そう言うと彼女は布団を被った。

「何なのよアイツは!!」

「アイツの目は人を見透かしているようで嫌い!!」

「偽善者ぶった最低の男!!」

「そうだ、呼び名がないと不便だし、君のことを”サニィ”って呼んでも良いかな？」

「良いけど、どういう意味よ？」

「彼女は布団の中から聞いた。

「”太陽の光”って意味だよ」

どんなに長い夜でも

そして、次の日の明け方・・・。

サニィはユエグスが寝袋の中で寝入っている事を確認すると、山小屋とユエグスの荷物の中を物色し始めた。

当たり前だが、サニィが望んでいたような自分の服になるようなものは特になかった。

こんなものでも無いよりマシよね・・・。

ため息を付くと、ユエグスが持ち歩いていたサラシを胸と下腹部に巻き、ベッドのシーツをドレスのように着て、その上からユエグスの革のマントを羽織った。

もともと保温効果の高いものに、更に魔力でその効果を高めているらしく、寒さを感じることはないし、高い防御効果も期待できそうだった。

他にあった物は山小屋に備え付けてあった予備のグローブと、シューズ。

何セットか置いてある中で、成長期の男子用とおぼしきものがちょうど良いサイズで、手の甲と足のつま先に鉄板を鋏で打ち付けてある機能的な物だった。

何故かサニィはそれが武器になると思った。

髪をユエグスが使っていた赤いハチマキで結うと、吐き捨てるように呟く言う。

「じゃあね・・・」

そして、彼女はカンテラを手に音を立てないようにと山小屋から出た。

薄い闇色の空・・・。

東の空だけは何となく明るくて、山の形が黒いシルエットになって見えた。

息を吸うと鼻の奥がジンジンと痛くて、頬がジリジリする。

相当寒いんだろうけど、それほど寒くは感じない。

それだけマントの効果が高いという事だろう。

これがアイツの物だったってのがちょっと気に入らないけど・・・。

とにかく、アイツが起きない内に出来る限り遠くに行こう。

信用出来ない奴と一緒にいるより、一人で居る方が安全だから。

ゴツゴツとした岩だらけの足下を、カンテラで照らしながら、おぼつかない足で一步一步下っていく。

もともと旅慣れているわけでもなく、しかも視界が悪いので安定している足場と、そうでない足場の区別が付かず、ぐらぐらとしている岩を踏んでは足を滑らせそうになっていた。

まだ、歩き始めて対した時間が経っているわけでもないのに、暗い不慣れな山道を何時間も歩いているような気もしたし、永遠と続いているような気もした。

歩くのに夢中でサニィは自分に危機が迫りつつあることに気が付かなかった。

その独特の死臭のような臭いに気が付いたときには既に遅かった。

カンテラで辺りを照らすと、光を反射して辺り一面に魔物の目が光った。

あまりの出来事に悲鳴を上げることはおろか、まるで蛇に睨まれたカエルのようにジットリとした汗をかいては硬直してしまった。

魔物を見たのは初めてじゃないと思うし、何匹かは退治したこともあるような気がするが、なにぶん数が違う……。

もはや何体いるのか解らない……。

そして、一番の驚異は目の前にいる一番大きな魔物……！！

毒蛇の尾と、鷹の翼と、ライオンのたてがみを持つ大猿……。

これほど大きく、そして美しくもあり恐ろしい魔物を見たことは無いと、間違いなく断言できる！！

到底戦ったって勝てるわけではない……。

だけど、結局誰も助けてくれはしないんだから、頼れるのは自分しかないんだから……！！

このまま、ただ殺されるより、戦って死んだほうがマシよ！！

「えいやあ————っ！！」

繰り出される回し蹴り！！

虚空に閃光が走り、サニィの周りを囲んでいた魔物数匹が吹っ飛ぶ。

ドッシリとした手応え有り！

次々に襲いかかる魔物の攻撃を寸手で受け流し、カウンターで胸を突き一撃で魔物達を沈めていく。

「やあっ！！」

腰を低く落とし、腰の回転の力と、腕の回転の力が合わさった鋭い突きは衝撃派を放ち、その延長線上にある魔物を錐揉みさせながらすっ飛ばした。

なんだ、私結構やれるじゃん！！

覚えていないけど、格闘技かなんかやってたのかな……！

だったら狙うはボスのみっ！！

雑魚なんか相手にしてもキリがないっ！！！

雑魚達の攻撃を縫うように交わし、一匹だけ優々と構えるその巨大な身体に、全ての力を乗せた一撃を放つ。

ぱあ————ん！！！

一面に弾け飛ぶ衝撃派！！！

だが、手応えはないっ！！

強い攻撃を繰り出したときが一番の隙となる！！

その周りの魔物達がすっ飛んでいく中で、その巨大な大猿だけは平然と立ち、サニィを殺意に満ちた目でジッと睨んでいた。

ヤバイ！！

そう思ったときには既にその巨大な大猿の両腕がサニィを潰そうと迫りつつあった。

ここまでかっ！！

死を覚悟した時、目の前を光の球が駆け抜け、それを食らった巨大な大猿は地を揺るがすような咆吼を上げてすっ飛んだ。

何が起きた？！

光の球が来た方向を見るとそこには、美しい細工の施された細身の長剣を構えた男が立っていた。

それはユエグスだった。

「大丈夫か？！」

「大丈夫・・・！」

そう言うとサニィはユエグスの方に駆け寄りその背中に隠れた。

巨大な大猿は何事もなかったかのようにムクツと立ち上がり、魔物達を引き連れユエグスの前に立ちふさがった。

そして、血と肉が飛び交う壮絶な戦いが始まった。

ユエグスがいかに強かろうとも、あれだけの魔物の数と、あけだけの大きな魔物を相手にして無事に生き残れるはずがない・・・。

アイツが魔物達を引きつけている間に逃げよう・・・！！

そうすればアイツは死んだとしても私だけは生き残れるから！！

サニィは死線を繰り広げるユエグスを横目に暗い山道を駆け下った。

どれだけ走ったのだろう。

何度も転び、息が切れた頃、立木に寄りかかって荒い息を落ち着いた。

目をつむり、深く深呼吸すると何故かユエグスの顔が思い浮かんだ。

私なんて助けに死に急ぐなんて馬鹿な奴・・・。

偽善者ぶった奴は死ねば良いんだ・・・！

頭の中にユエグスが死ぬ姿が浮かぶ。

それは何故か、飢えて死んでいった弟の姿に重なった。

サニィは頭に浮かぶユエグスの姿を振り切って歩き出そうとする。

一歩足を踏み込むと、ズキンと胸が痛んだ。

「本当は優しい子なんだよね」

頭に響くユエグスの声・・・。

違うっ！！！！

私は優しくなんか無いっ！！！！

私は偽善者なんかじゃないっ！！！！

なのに何でっ！？

何でアイツが死んでしまうと考えると、こんなにも怖いっ・・・？！

こんなにも苦しいのは何故っ！？

もう嫌っ！！！！

気が付くとサニィは走り出していた。

自分では山を駆け下っているつもりでも、無意識のうちに元来た道を引き返していた！

はあはあはあ！！

ドクン！ドクン！！ドクン！！！！

視界が狭まり、自分の息の音と、心臓の音だけが聞こえていた。

速く、速くここを抜け出したい！！

そんな思いに駆られていた。

そして、狭い回廊を抜け出したように、一気に視界が広がる。

目の前で巨大な大猿の魔物と戦うユエグス。

その他の魔物は激しい戦いの中で死に、辺り一面に魔物達の死骸の山が出来ていた。

その中から深手を負っている一匹の魔物が起き上がり、ユエグスに襲いかかろうとしているのに気が付いた。

ユエグスはまだ気が付いていないっ！！

考えるよりも先にその魔物に向かってとび蹴りを食らわしていた。

だが、感情の高ぶりは技を鈍らせていた。

急所を外して止めをさせないばかりか、魔物の牙が迫りつつあった。

またドジった……。

こんなことで死ぬなんて、私、何やっているんだろう……。

サニィは苦笑すると、全身の力を抜いて抵抗するのを諦めた。

ユエグスはその様子がスローモーションのように見えていた。

サニィがっ！！！！

サニィが危ないっ！！！！

ドクンっ！！！！

ドクンっ！！！！

視界が反転してユエグスの心に深く刻まれた映像がフラッシュバックする。

それは少年時代の自分を庇って、黒いローブを羽織った少年にナイフで刺された、栗色の髪を持つ少女の姿……。

その事切れる前の優しい微笑み……。

冷たくなっていく体温……。

もう二度と、失いたくない！！！！

もう二度と、失うものかっ！！！！

その時、ユエグスを中心に光が生まれ、その周囲全体を飲み込んでいく！！

光の中で巨大な大猿も、サニィを襲っていた魔物も、おびただしい数の魔物の死骸も砂になって消滅していった。

「何、この魔力は……？！」

サニィが言うとユエグスは力を使い果たしその場に倒れた。

どうしたんだろう……？

何も見えない……。

何も感じない……。

あの子は？！

サニィはどうなったんだ……？！

俺はあの子を助けられたのか？！

繰り返しフラッシュバックする過去の映像・・・。

もう嫌だ・・・！！

もう嫌なんだあんな思いをするのはっ・・・！！

だから、同じ事を繰り返さないため、強くなるって決めたじゃないか・・・！！

なのにまた俺は助けることができなかつたのか・・・？！！

ちくしょう・・・！！

ちくしょう・・・！！

ちくしょう・・・！！

その時、ユエグスの手に柔らかい手の感触があつた。

他に何も感じない世界の中で、その手だけがとても暖かく感じた。

暖かい・・・。

この手は・・・？

ゆっくり目を開けると、そこには黒いローブの少年に殺されたはずの少女の顔が・・・。

俺の事を心配そうに見ている・・・。

ソーラ・・・？

いや、違う・・・。

この子は・・・。

「サニィ・・・」

ユエグスはその手を強く握りしめると、ユエグスの頬を涙が伝つた。

サニィの目にも涙が浮かぶ・・・。

「生きててくれてありがとう・・・」

ユエグスはそう呟いた。

「私、あなたを失うのが怖かつた・・・。

あなたはそんな私を優しいと言うかも知れないけど、私は優しくなつかない・・・。

きっと私は一人になることが出来ない、弱くて臆病な人間なだけなの・・・。

だから、私のことをもう優しいと言わないで！

心が痛いから！！」

彼女の頬を大粒の涙が伝つた。

そして、嗚咽を堪えながら泣く。

「臆病なのは俺も同じだよ・・・。

人は一人じゃ生きられないことを知っているから優しくなれるし、強くなれるんだと思う・・・。

それを知っている君は、優しい子だよ・・・。

なにより、俺を助けようとしてくれた気持ちが嬉しい・・・。

助けてくれてありがとう」

ユエグスは半身を起こすと、そつとサニィの首を抱きしめた。

とても柔らかくいい匂いがした。

心に満たされる優しい気持ちが、そこにサニィがいると実感できる……。

「生きててくれてありがとう……！」

でも、もう無理はしてほしく無い……」

そう言うとユエグスは嗚咽を堪えて泣き出した。

初めはドキッとしたサニィもユエグスの頭をギュッと抱きしめると、とても満たされて自然と涙が零れた。

そして、東の空に長い夜を越えて再び日が登る。

サニィは、長い間、夜を歩きつづけたユエグスにとっての太陽だった。

どんなに長い夜でもきっといつかは……。

「・・・」

その”現状”を見て絶句するサニィの背中を見て、ユエグスは下手に希望を与えるんじゃないかと後悔した。

日の出と共に出発して、そのまま休むことなく歩いて山道を下ることにした。

あんな状況だったし、再び魔物の大群が現れないとも言えないので、長居をしてはいたく無かったからだ。

旅慣れたユエグスにとっては、まる一日歩いたとしても何でもないような岩肌の山道だったが、旅慣れていないサニィの足下はお簿付かず、さらに激しい戦闘の後だったのでかなり疲労しているようだった。

疲れたサニィを励ますために、ユエグスは山の麓にある小さな村の話をした。

それは小さな村だが、山を神と崇める山守りの古い習慣があり、かやぶき屋根の独自な家で自然と共に暮らす、昔ながらの良い村だ。

昔からアナマ山に行く旅人の宿場でもあるので、少し休むにしてもちょうど良い。

そんなユエグスの話を聞いて、サニィは”初めての村”に期待を寄せて、慣れない山道を2時間ほど歩き続け下山した。

だが、そこに待っていたものはあまりにも酷い現実だった。

家々は燃え尽きて瓦礫の山となり、村の奥へと続く一本道に沿って連なっていた。

それは入ったら最後戻ってはこれない地獄へと続く道のように思えた。

「・・・」

サニィは無言のまま歩み出す。

ユエグスは無意識のうちに彼女を引き留めようと、彼女の肩に手をかけようとするが、その手は彼女の肩にふれる事なく空振った。

後を追うユエグスは真正面から差し込む日の光に目を細めながら、サニィの肩の向こうに逆光でシルエットになった、瓦礫に突き刺さった十字架を見た。

何故かその十字架がオブジェのように思えた。

破滅的なオブジェだ。

あたり中に漂うむせ返るような焦げた煙の臭いと、拭いきれない吐き気を催す死臭が漂う。

そして・・・。

クルシイ・・・！

アツイヨオ・・・！

タスケテ・・・！

オトウサーーーン！！ オカアサーーーン！！

ヨクモ、ツマヲ、コドモヲ・・・！！

コロシテヤル・・・！

コロシテヤル・・・！

コロシテヤル・・・！

そこに染み着いた残留思念の強さが、惨劇の日の浅さを物語っていた。

何者かが供養したのか、魂と死体はすでにそこにはなかったが、残された思いの強さは半端な物ではなかった。

それは背筋を凍らせ、心を浸食しては自我を失いそうになる。

ユエグスは下腹に気を集中し、自分は自分だと言い聞かす事により、なんとか自我を保つ。

心がざわつき悲しみに沈み行くこの感覚、何度経験しても慣れるものじゃない。

いや、永遠に慣れたくも無いな。

ユエグスはサニィの背中を見る。

マントを羽織ったその小さな背中は、逆光でとてもまぶしく見えた。

その強さと暖かさは、地獄の中の聖母ようだった。

ユエグスは彼女にも”そういう力”がある事を初めて会った時から感じていた。

同じような力を持っている者同士は互いに引き合うし、彼女の”特殊性”を考えれば、そんな力を備えているのは当然だろう・・・。

おそらく、彼女は自分より感受性が敏感で、より多くハッキリと”声”を聞いていると思う。

なのに先に進むサニィは、こんなに強い思いが渦巻く中で、自我を失わないばかりか、なお強く輝いている。

なんて、強い心を持つ女性なんだろう・・・。

だけど・・・。

ユエグスは強い心を持つサニィに心惹かれながらも、その強さが悲しかった。

故郷の墓・・・。

そう刻まれた十字架の前で立ち止まるサニィ。

「戦争がこの世からなくなれば良いのに・・・」

そう言うサニィの横顔は新たなる決意を秘めていた。

そんな、彼女の顔を見るとユエグスはいろんな意味で気が重くなる。

「状況から見て、この村を滅ぼしたのは帝国軍ではないはずだ。

紛争も、宗教的な理由も無い領土内の村を滅ぼしたところで帝国軍に利益は無い。

それでも、帝王を殺すのか？」

ユエグスは野暮だとは思いながらもサニィの心中を確かめずにはいられなかった。

「戦争をするのは何も帝国軍だけじゃない。

すべての人が生き残るために、背負った悲しみをはらすために、憎しみ合い殺し合う。

善も悪もない、すべてが間違った世界・・・。

掠れかけた私の記憶の中に残る悪夢のような世界・・・。

もし、帝王が世界神なら殺さなければならない。

そんな、世界にさせない為に・・・。

すべての戦争が無い世界にする為に！」

サニィの揺るがない強い決意に、ユエグスは心の中で苦笑する。

過去って奴はどんなにずっと遠回りして避けてきても、何時かは追いつかれてしまうもんだな

。

これも運命だと思って、俺も決意するしかないな……。

これから先、どうなるか解らないが……。

まあ、何とかなるさ……！

光の中で輝くサニィの横顔を見ると、その光の向こうに希望がある気がしてならなかった。

「よし……！」

反帝国軍と合流しよう。

リーダーのラミネスとは昔なじみで顔が利く。

信頼出来る義理堅い男だ。

きっと、力になってくれるはずだ！」

「ありがとう……！」

輝く太陽が地面に落とす二つの影が、瓦礫の十字架から遠ざかっていく。

そして、二人の旅が始まった。

楽しいひと時

深い森を抜けると、何処までも続くような草原が広がっていた。

忘れた頃に吹き抜ける暖かい風が、ささささっと草花を揺らして、晴れた日の柔らかいにおいを運んだ。

風になびく髪を押さえながら、目を細めて遠くを見晴らすと、昼下がりの太陽が落とす雲の影が大地を流れていた。

ふと、振り返れば、頂に雪化粧をしたアナム連峰がそびえている。

とても暖かく心地の良い陽気の中、丘を縫うように曲線を描きながら何処までも続く道を、サニィは前に行く背中を追うように歩き続けた。

風に長い金色の髪を靡かせた、とても広くて深みのある背中。

西日に照らされたユエグスの背中は光の中で、何故か影を背負って見えた。

それが何なのか、サニィには解らない。

でも、少し寂しさを感じるその背中がサニィは好きだった。

時折、足を休めては交わす何気ない言葉。

二人で歩んだ果てしない道。

二人で共有している情景。

その一つ一つがまっさらなサニィの脳裏に刻まれ、掛け買いのない宝物になって行った。

重かった足取りも何時しか軽くなって、シャリシャリとした砂利道を歩く感触や、サクサクとした草の道を歩く感触、ズッシリとした土の道の感触は、その情景を伴ってサニィの脳裏の中でリピートしていた。

そして、ユエグスの背中を追い続ける。

何時までも・・・。

何時までも・・・。

ガサッ。

何かが動く音でサニィは目を覚ました。

そこは白い石で作られた宿のベッドだった。

窓から夕日の光が射し込んで全てが真っ赤に見えた。

「ごめん、起こしちゃったね」

隣のベッドで荷物を整理するユエグスの姿があった。

「あれ、なんで私こんな所にいるの・・・？」

草原を歩いていたんじゃないかなかったっけ・・・」

サニィは寝ぼけ眼でユエグスに聞いた。

「もう、草原は通り過ぎて、ここは砂漠の街カイロだよ」

あきれたように笑いながらユエグスが言う。

そうだ、宿に付いてベッドに腰をかけて目をつむると、歩いているときの感覚がよみがえって、回想しているうちについつい眠っちゃったんだ。

わたし、夢の中でもユエグスの背中を追いかけてずっと歩いてた。

「疲れちゃったみたいだけど、食料や道具の買い出しどうする・・・？

夕食までの間に行こうと思うんだけど、俺だけで行って来ようか？」

少し心配そうにサニィを見つめるユエグスにサニィは微笑みかけた。

「ううん、どうしても街を見てみたいんだ。

私も一緒に行く」

二人がオアシスの畔にある宿、その名も「オアシスの隣」を一步出ると、カイロの街は全てが夕日で赤く染まっていた。

砂漠の日射しは夕方になってもなお強く、その日射しの強さが独特な夕日となって、全てを赤く染めるのだ。

街を囲う塀も、白い石造りの建物も、砂の積もった赤煉瓦の道も、ヤシの木も、日に焼けた人々の顔もますます赤い。

汗ばむような砂漠の暑さの中で、オアシスから道に沿って流れる水路の水面が、赤い夕日を映してキラキラと輝き涼しげだった。

街の入り口から一番奥のオアシスまで一直線に続く、商店や露店の建ち並ぶメインストリートの人混みの中をユエグスとサニィは行く。

サニィはあちこち歩き回って、並べられた商品を物珍しげに眺めては、毎度のごとく商魂たくましい店員に声をかけられて、後から来たユエグスが断って歩いた。

「いちいち、相手しなくて良いの」

そう言うユエグスにサニィは微笑んで返す。

「だって、面白そうなものが沢山あるし、人と話すのって楽しいんだもん」

その満面の笑みにユエグスは苦笑して、まあいいかと言わんばかりに頭をかいた。

そんな、ユエグスの顔を見て、サニィはますます微笑んだ。

一通りのお店を回り、食料や道具を買いそろえると、二人はメインストリートから少し入ったところにある公園に来た。

オアシスから引き込まれた水で出来た小さな池を囲う公園。

砂漠の街とは思えないぐらい植林された緑が生い茂っていた。

ほんの少し緑があるだけで、空気は澄んでひんやりとして気持ち良かった。

「ちょっと待ってて」

と言い、ユエグスはサニィと荷物を残してその場を立った。

そして、公園の入り口にある露店へと向かって行った。

どうしたんだろう・・・？

サニィがそう思うまもなくユエグスは紙コップを二つ持って帰ってきた。

「ほら、喉かわいたでしょ」

そう言うユエグスは紙コップをサニィに手渡した。

そして、二人は木陰にある小さなベンチに腰をかける。

中には少し黄色いドロドロとした液体が入っていた。

「・・・」

あまりの怪しさにサニィは絶句する。

「これはヤシのミックスジュースだよ。

ヤシをベースにして、マンゴーやバナナ、熱帯のフルーツをすりつぶして混ぜたんだ」

サニィは初めて見る異様な液体にちょっと不安を感じたが、勇気を出して飲んでみた。

すると、何とも言えない酸味を帯びた甘さが口の中で広がる。

シャリシャリとした細かい氷が混ざっていて、冷たさが脳天まで突き抜けた。

その冷たさが砂漠の汗ばむ暑さにちょうど良かった。

「おいしいね」

「喜んでもらえて良かったよ！

俺のお気に入りなんだ！

小さい頃、親父と一緒に旅をしたとき買ってもらってさ。

それ以来、ここに来る度に飲んでいるんだ。

親父と一緒に時間を過ごしたのも、親父に何か買ってもらったのも初めてだったから、印象に残ってるのかもしれないけど」

嬉しそうに話すユエグスの顔はまるで子供のようだった。

ユエグスがそんな表情をするのも、自分のことを話すのも初めてだったから、なんだかサニィは嬉しくなった。

だけど、サニィにはそんなユエグスを見て声を出して笑ってしまった。

「ん、どうしたの・・・？」

ユエグスはサニィの予想外の反応にきょとんとする。

「だって、ユエグスの口の周り、ジュースのカスが付いているんだもん。

まるで泥棒のヒゲみたい・・・！」

「そう言う、サニィだって付いているよ」

サニィは腕で口を擦ると、腕にジュースのカスが付いていた。

「ほんとだ！ 私も泥棒みたいだったのかな？！」

そう言うときサニィはますます笑った。

ユエグスもつられて笑ってしまう。

夕暮れの公園に二人の笑い声が響いた。

このウキウキするような気持ちはなんだろう？

「なんだか、楽しいね！」

サニィは微笑みながら言った。

楽しい・・・？

そう、私は楽しいんだ・・・！

ユエグスと一緒に過ごす時間がとても楽しいんだ。

こんなにも、人と過ごす時間が楽しいって思ったのは生まれて初めてかもしれない。

記憶を失う前も、きっと楽しいことや嬉しいこともあったと思う。

でも、同じように続く毎日や、辛さや悲しさの中で、そうと気づかず通り越していたのかも知れない。

私が今、楽しいと思えるのは、きっと・・・。

サニィはユエグスの顔を見て満面の笑みを浮かべた。

その笑顔にユエグスは思わず胸が高鳴った。

「そうだね・・・！」

夕暮れの木々に囲まれた公園に二つの影が落ちる。

その手は強く結ばれていた。

辺りが夕闇に包まれた頃。

ユエグスとサニィがオアシスの畔にある宿に戻るために、オアシス側のメインストリートの外れまで来たときだった。

オアシスの前の一際大きな建物の前に人だかりが出来ていた。

「何が起きたの・・・？」

そう言うサニィにユエグスが答える。

「さあ、あれは街の自治体の建物だけどね、って何処行くの?!」

ユエグスが答え終わる前にサニィは自ら進んで人だかりの中へと向かっていた。

「決まっているでしょ、見に行くのよ」

「以外と物好きだな、もう・・・」

とユエグスはため息をつきながらサニィに続いた。

人だかりを押しつけて、無理矢理間を縫うように人だかりの中心に行くと、そこは自治体の受付だった。

「なんだ、喧嘩か・・・」

ユエグスが呟いた。

どうやら、栗色の髪少年が、受付の男に突っ掛かっているようだった。

サニィはその少年の後ろ姿になぜだか既視感を感じた。

その少年を知っていると言うより、懐かしい感じだった。

「あの子、どうしたの？」

サニィは少年の背中をじっと見つめながら、隣で野次馬をしている中年の親父に聞いた。

「なんでも、崖崩れで通行止めになってるのにも関わらず、地下水路道を通りたいらしいよ・・・」

「ここんところ毎日来て抗議しているらしいけどねえ・・・」

「ふうん・・・」

その時、二人の抗議がエスカレートして来て、サニィ達の所まで会話が聞こえてきた。

「そんな事言われてもねえ、通せないものは通せないの!!」

崖崩れしてるんだから、仕方ないでしょ!!

復旧工事が終わるのを待つしかないんじゃないの?!」

役所の受付の男がヒステリックな声を響かせた。

「じゃ、何時開通するんですか?!」

そう言う少年に受付の男が返す。

「そんな事、私に聞かれても解るはずが無いじゃない!!」

「いい加減な事を言って、いつまで待たせれば良いんだよ!!」

こっちは人の命がかかっているんだ!!

今すぐにも通らせろ!!」

「きい———っ！！」

もう、しつこいわねえっ！！」

男が受付のカウンターの裏側にあるスイッチを押すと、ガコンと言う音と共に天井が開いて、ガラガラと言う音を立てて鎖に吊された檻が降りてきた。

「ぐうっ———っ！！」

と低いうなり声をあげて、檻の中身は黄色い牙をむきだし、その鋭い目を光らせる。

それは犬をよりどう猛に巨大化させたような魔物だった。

比較的人間に慣れやすい犬型の魔物を番犬として使うことは珍しくない。

「おおっ———っ！！」

当たり中から歓声上がる。

何喜んでいるのよ、見せ物じゃないんだから、とサニィは思いながらも、自分も野次馬をしている事を思い出した。

「さっさとやられちゃいなさい！！」

と男は金切り声を出す。

「くっ！！」

少年は唇をかみしめながら、背負ったサヤから一振りの剣を抜いた。

「おおっ———っ！！」

またしても歓声が上がった。

美しい装飾が施された両刃の大剣。

それはうっすらと不思議な光を放っていた。

「あれはっ！！」

ユエグスが声を漏らした。

「強い魔力を感じるけど、あの剣は何なの・・・？」

剣から発せられる強い魔力に、身を震わせながらサニィが聞く。

「あれはマハラード皇家の宝である魔剣、裁きの剣・・・！」

紛失したと言われていたが、何故あの剣をあの少年が持っているんだ・・・？！」

少年は剣を手にして身構える。

その構えはサニィの目から見ても素人である事は明らかだった。

「助けなくて良いの・・・？」

不安を感じたサニィが聞く。

「いや、少し様子を見よう・・・」

ユエグスは息をのんだ。

そして、檻の鉄格子が開き、犬の魔物はその鋭い爪を光らせながら飛び出した。

「ぐお———っ」

ものすごい勢いで少年に迫り来る魔物。

「う、うわあ———っ！！」

少年はその恐怖に負けて、かなり早いタイミングで剣を繰り出して空振る。

魔物はジャンプで剣を飛び越すと、無防備になっている真上から少年に襲いかかる。

「ガルルルルルっ！！」

体に乗り掛かれ、汚いよだれを垂らす魔物の牙が眼前に迫る。

鋭い爪が肩に食い込んで血がにじむ。

「くそお————っ！！」

少年は必死にじたばたするが、自分の体重の倍はある魔物を押し返すことは出来ない。

それを見たユエグスは苦笑する。

じっと、自分の顔を見つめるサニィにユエグスは笑って返した。

「勝負あったようね！！」

もう五月蠅く出来ないように、痛い目あわしちゃいなさいっ！！」

受付の男が指を鳴らすと、その牙が少年の肩口をねらう。

「うわぁ————っ！！！！」

少年が目をつむり激痛を覚悟したとき、体にかかっていた重みが消えた。

何があった・・・？！

そう思った少年が目を開けると、犬の魔物は宙を舞っていた。

そして、目の前には美しい細工を施された細身の長剣を手にした、長身の剣士が立っていた。

「おお————っ！！！！」

新たな乱入者にその場は歓声を上げて再び盛り上がった。

「ぐう————っ！！」

体制を立て直した魔物は、低いうなり声を挙げながら剣士・・・ユエグスと対峙する。

ぶつかり合う眼光と眼光。

圧倒的なユエグスの雰囲気プレッシャーを感じた魔物は、やけくそになったように突進して来た。

迫り来る魔物を前に、落ち着き払い、構えすらないユエグス。

魔物がユエグスの眼前に迫り、誰もが先ほどの少年の二の舞を想像したとき、ユエグスは僅かにその身を翻して両肩を狙っていた爪を交わすと、手にした剣の束を魔物の眉間へと突き立てた。

声も出さぬまま気を失い、ドサっと言う音と共に地面に伏せる魔物。

その瞬間の出来事に辺りの野次馬も歓声を上げることすら忘れて呆気にとられていた。

ただ一人、自分の期待に応えてくれたユエグスに対して満面の笑みで返すサニィを除いて。

何故だか悲しくて

すっかり日が沈み、まん丸い月が昇って夜を迎えた頃。

ユエグスとサニィが宿屋「オアシスの隣」の前まで戻って来ていた。

偶然にも同じ場所に宿を取っていた少年・・・リュウトを連れて。

ユエグスが宿の戸を開くと、デップリ太った女将さんが迎えてくれた。

「もう、夕飯が出来ているよ早くお上がり」

そして、続いて入るリュウトの顔を見るなり、女将はリュウトを思いっきり抱きしめた。

「おばさん、クルシイよ・・・！」

そう言うリュウトに女将は更に力を入れて抱きしめる。

「何も言わなくて良いよ・・・。

60年も女やれば、アンタの顔見れば結果ぐらい解るさ・・・。

アンタも小さい頃から知ってるんだから・・・」

「ううっ・・・」

女将さんの母のような暖かさに心打たれてリュウトは声を殺して泣き出した。

「こんど、あの受付は私がフライパンでぶん殴っておくからね・・・！」

そんなリュウトと女将を横目に食堂へと向かうユエグスとサニィ。

二人を見るサニィの胸は優しい気持ちでいっぱいだった。

今まで、人の優しさの裏には見返りを求める気持ちがあると、心を閉ざし人を信じられなかったサニィにとって、リュウトに優しく接する女将の気持ちがとても暖かく思えた。

食堂のカウンターテーブルに座ると、コック兼宿屋の主人が結露したポッドから、冷たい水をコップに注いだ。

サニィはリュウトの事を気にせずに入られず、キョロキョロと食堂の入り口ばかり気にしていた。

「あの子は近隣の村に住んでいた巻き売りでね、昔からうちのお得意さんなんだけど、少し厄介な事情があってねえ・・・。

その・・・」

と、料理を運ぶ主人がサニィに言ったは良いけど、途中で顔を曇らして口ごもった。

そして、そのまま重い面もちで無言のまま料理を運び続けた。

「直接聞けば良いさ・・・」

とユエグスが言うった時、目を真っ赤に腫らしたリュウトが食堂に入ってきた。

そして、カウンターテーブルに座り、あらかじめ用意してあった食事をゆっくりと口に運び始めた。

途中、女将が様子を見に来て、

「私も作ったんだから、残さず食べて元気だしなよ」

とリュウトの肩を叩いていった。

無言のまま食事を終えた頃、ユエグスが切り出した。

「良かったら、事情を話してくれないか？

その剣の事もだ。

場合によっては協力できるかも知れない」

リュウトはユエグスの目を見た。

信じられるのだろうか・・・？

と一瞬考えたが、先ほど見たユエグスの圧倒的な実力を思い出した。

他に頼る者もないリュウトは、藁をも掴みたい気持ちだった。

「俺は・・・」

そして、重い口を開く。

「俺は、この近くの農村に住んでいたんだ・・・。

だけど、俺の村は突然襲撃されて滅ぼされた・・・」

サニィの脳裏に、アナマ山の麓の瓦礫の山と化した村がフラッシュバックした。

その額に汗が浮かぶ。

それは確信に近いものがあった。

「村の名はアナマ村・・・」

まさかとは思ったが、実際その名を聞くと絶望的だった。

あの死臭、あの残留思念、あの凄惨さ・・・。

忘れる事は出来はしない・・・。

サニィは顔を歪ませた。

ユエグスは表情を殺し、黙ってリュウトの話に聞き入っていた。

「俺が山に薪拾いに行っている間に村は襲われ、帰ってきたらすでに村は・・・」

リュウトが言葉を詰まらせて俯いた。

そんなリュウトを見て、サニィはいても立ってもいられずに声をかけた。

「いいのよ！

無理して辛いことをしゃべらなくても！

私たち、君の村がどうなったか知ってるから・・・。

今日、通ってきたから・・・」

サニィはリュウトの姿に死んだ弟の面影を感じていた。

そして、まるで戦争により全てを無くして、悲しみだけを背負った自分の姿を見るようだった

。

あの村の惨状を見た瞬間から、サニィにとってリュウトは他人ではなくなっていた。

「ごめんなさい・・・。

本当に辛いのは君の方なのに、私も聞くと辛くなっちゃうから」

サニィの優しさにリュウトは少し心が軽くなった気がした。

「俺に出来ること”をして、村を出ようとしたら、そこで男が待ち伏せしてたんだ。

そして、教えてもらったんだ。

村を襲ったのは、”反帝国軍”だって・・・！

幼なじみのユツルが反帝国軍にさらわれて、ヤゴンの滝にある基地で監禁されているって……！」

反帝国軍という名を聞いてサニィはハツとする。

ユエグスはサニィの顔を見て黙って頷いた。

「この剣はその男にもらったんだ……。

いざという時に俺を助けてくれるって」

「その男はどんな奴だった……？」

そう聞くユエグスの声は静かだが、とても凄みのある声だった。

リュウトの目をじっと見つめるその目は、殺気にも近いものがあった。

「そ、それは、黒いローブを着た男だった……。

背が高くて細身だけど、顔は解らなかった……」

それを聞いたユエグスは呆然としていた。

自分の知らないところで過去が動き出している……！

リュウトの言っている事は、自分の記憶と一致していて、とても信憑性が高い。

だからこそ驚異を感じずにはいられなかった。

サニィ、リュウト、反帝国軍、裁きの剣、そしてそのローブの男……。

全てが見えない糸で結ばれている。

それが何なのか何も見えはしない。

一つ解ることは今、ここで起きていることが現実だと言うこと。

すでにそれは動きだし過去ではなくなっていた。

もう、逃れることは出来ない……！

奮い立ち決心をしたユエグスの顔は、いつもの優しいユエグスの顔ではなく、サニィの知らない覇気と強さに満ちた顔だった。

その顔はとても凛々しく格好良く思えたが、何処か遠い世界の人間のように思えて、寂しく思えた。

「事態はかなり複雑で、すでに君の手に負えるものじゃない……！

君の幼なじみは絶対に助けるから、全てを俺に任せてくれないか？

その剣も君の手に余る……！」

手を差し出された手にリュウトは一瞬迷った……。

(でも、僕は君に少女を救って欲しいと思う)

頭の中でローブの男の言葉がリフレインした。

俺だって、自分で手でユツルを救いたい……。

でも、敵は強くて、俺の手には負えないって……！！

(無理だと思っていたら、出来ることも出来ないよ……)

仕方ないんだ……！！

俺はユツルを救いたいんだ……！！

ユツルを救えば良いんだから、それで良いんだよっ！！

「おねがい・・・します」

リュウトは目をつむり、ユエグス裁きの剣を差し出した。

ユエグスの手が裁きの剣の束を掴む。

リュウトにはその様子がスローモーションのように見えた。

敵だと思われるローブの男から剣を受け取るとき、恐怖を感じることはなかったのに、味方をしてくれるユエグスに剣を渡すのはとても怖かった。

まるで、悪魔と取引してしまったような、そんな喪失感があった。

そして、ゆっくり立ち去っていくユエグスの背中を目で追いかける。

そして、最後まで自分を気かけながらもサニィも立ち去っていく。

その二人の背中が見えなくなるまでリュウトはじっと見つめていた。

その瞬間がずっと続くかと思うほど、ひどくゆっくりと感じた。

ホントウニ、コレデヨカッタノカ・・・？

なぜだか悲しくて、悲しくて、声を殺して泣いていた。

自分の力で

誰もが寝静まった夜。

砂漠の街の夜空には、人知れず真っ赤な大きな月が輝いていた。

あまりに大きく赤く輝くその月は、見た物の心をえぐり取るような妖気を漂わせ、まるで死の国を照らす暗黒の太陽のようだった。

リュウトは一人、宿のラウンジのテラスから、オアシスの水面に揺らめき浮かぶ大きな赤い月の影を眺めていた。

足音がしてテラスの入り口を見ると、そこには栗色の髪を下ろして浴衣を着たサニィがいた。

リュウトは年上の女性が見せる可愛らしさに一瞬心を奪われたが、ユエグスの顔が浮かびすぐに我に戻る。

「眠れないの・・・？」

隣に来て静かに聞くサニィにリュウトは頷いて返した。

「うん・・・」

「・・・そうだよ、眠れるはず無いよね」

そう言う声はとても優しく、自分のことを認めてくれるようで嬉しかった。

「・・・眠るのが怖いんだ」

リュウトは一人で過ごす夜の気持ちを話したくたまらなくなっていた。

辛い気持ちに押しつぶされそうで、誰でも良いから気持ちを聞いてもらいたかった。

そして、崩れるように話し出す。

「目をつむると、思い出したくもないことを思い出すんだ・・・。

寝てしまえば嫌な夢を見る・・・。

起きていれば、不安や悲しみに頭がグルグルして、気が狂うような眠気の中で幻を見るけど、嫌なことを思い出すよりましなんだ・・・」

リュウトは、ふと我に返り口ごもる。

「何で俺、こんな事話しているんだろ・・・。

俺の事なんて、あんたには関係ないのに・・・。

迷惑かもしれなにいのに・・・」

下を向くその横顔をサニィが強い目でじっと見つめる。

「迷惑なんかじゃないよ・・・！

私、リュウトの話が聞きたいから。

今、話したいことを話さない、ずっと気持ちを引きずるだけだよ」

「・・・ありがと」

そう小声で言うとリュウトは遠くを見つめながら話を始めた。

「ずっと、ユツルの事が心配で、何も出来ない自分が歯がゆくて、どうしようも無いほど辛かった。

だから、ユエグスにユツルの事を任せて、気持ちが楽になると思ったけど、全然楽になんかな

らなかった。

心を吹き抜ける冷たい風が、止まることなく、よりいっそう強く吹くばかり」

「心に吹く風？」

サニィが聞くと、リュウトは頷く。

「心に風が吹くと、孤独で、切なくて、悲しくて、どうしようもなくなるんだ。

全てが何か違う気がして、自分が生きていることすら曖昧に思えてしまう。

小さい頃から、気が付いたら時々吹くようになっていた風だけど、あの日から、ずっと吹き止まない。

どうやったら、止まるか自分じゃ解らないんだ・・・」

サニィはリュウトのその気持ちが、自分が抱いていた気持ちと同じだと思った。

ユエグスと出会う前の自分の気持ちに。

戦争で全てを失い、誰も信じられず、悲しみや憎しみに取り付かれ、孤独に生きていた時の気持ちに・・・。

「・・・前に風が吹き止まなかったときは、きっと旅に出れば風が吹き止むんじゃないかと思った。

でも、義父さんに旅に出たいってこと、反対されるのが怖くて伝えることが出来なかった。

後になって旅に出ることを許してくれていたって知ったけど、その時はそんな事を知る由もなく、何時かは誰かがどうにかしてくれるんじゃないかって夢見てた。

その夢が叶ったのかもしれないけど、結局、こんな形で旅に出ることになったんだ。

あんだけ望んでいた旅に出れても、ただ虚しいだけで全然嬉しくない。

風も吹き止むこともなかった・・・」

リュウトは俯く。

(生半可な気持ちで己に見合わぬ事をして身も滅ぼすだけだ)

不意に神父の言っていた事が思い出される。

本当にその通りだった・・・。

「村を滅ぼされ、義父さんや友達・・・みんな殺されて、ユツルはさらわれてしまった・・・。

望んではいけない夢を見て、何もかもなくしてしまった俺には、心の風なんて永遠に止められないのかもしれない・・・」

「そんなことないよっ・・・！」

サニィはギュッとリュウトの手を握った。

その目は夜の闇の中で強くキラキラと輝いていた。

リュウトはその目に飲み込まれるようだった。

「リュウトはまだ何もしてないじゃない！！

何もしないまま流されて、自分自身を諦めて、誰かが何かをしてくれるのを待っているだけじゃない！！

流されるままだ生きていたら、きっと綺麗なものを見ても、楽しいことがあっても、それが当たり前になって、何も感じないまま通り過ぎてしまう！！

生きていることすらも感じられなくなってしまう！！

きっと、それじゃ何も変わらないまま、ただ、終わりを待つだけ……。

そんなんじゃ悲しいよ……！！

だから、自分自身を変えようよ！！

自分を変えられるのは、自分だけだから！！

そんな自分を変えて、自分の居場所を勝ち取ろうよ！！

そうすれば、きっと風も止まるよ！！」

そう、今までの私がそうだったから、リュウトの気持ちは痛いほど分かるよ……。

サニィはリュウトの手を強く握りしめる。

「自分が本当にしたいこと、解っているんでしょ？！」

リュウトは血が沸き立つように熱くなり、胸がドクンドクンと強く高鳴る。

(でも、僕は君に少女を救って欲しいと思う)

リュウトの頭の中で黒ローブの男の言葉が木霊する……。

そう、俺は本当は自分の力でユツルを救い出したかったんだ……。

だが、その思いをユエグスの言葉がうち消す。

(事態はかなり複雑で、すでに君の手に負えるものじゃない……！)

でも、俺の力じゃ、どうしようもないんだ……。

あんな弱い魔物すら倒すことの出来ない俺にはとても無理だ……！

「自分に言い訳ばかりして逃げていたら、何も変わらないよ……！」

(無理だと思っていたら、出来ることも出来ないよ……)

サニィの言葉と黒ローブの男の言葉が不意に重なった。

リュウトは歯を噛み締め、サニィの手を力強く握りしめた。

その目は強く輝いていた。

「俺はユツルを救い出したい……！」

例え無理でも俺の気持ちは変わらないんだ……！」

「無理じゃないよ……！」

確かに今は力もないし無理かも知れないけど、だったら強くなれば良いだけよ！

自分の居場所を勝ち取れるだけ強い男になろうよ！」

リュウトにはサニィが夜の闇を払う朝日のように思えた。

その言葉が、目が、サニィの全てがリュウトに勇気を与えてくれる。

「明日、ユエグスに言ってみるよ……。

自分の力で、ユツルを助けたいって……！」

「その必要は無い」

テラスにユエグスの声が響いた。

テラスの入り口には裁きの剣を手にしたユエグスが立っていた。

ユエグスは一步一步、リュウトに近づいて来る。

その大きな影は何故か威圧的に見え、反対されるんじゃないかと、リュウトは息を飲んだ。

だが、横にサニィの強い視線を感じ、リュウトは必死に弱い自分を押し込めて、ユエグスを見た。

ここで逃げていたら、今までと同じじゃないか！！

俺はもう、逃げないっ！！

俺は変わるんだっ！！

「俺に・・・。

俺にその剣を貸して下さいっ！！

ユツルは、ユツルだけは自分の力で助け出したいんですっ！！

今の俺にはその剣を使うことも、ユツルを助け出すことも出来ないかも知れないっ！！

でも、必ず強くなりますから！！

だから、お願いします！！」

リュウトは深々と頭を下げる。

解ってる・・・。

解っているさ・・・。

ユエグスは心の中で繰り返し呟きながら、その手にした裁きの剣を差し出した。

予想外の反応にリュウトはドキッとしながらも、その剣を受け取った。

その剣を手にしてまだ僅かしか立っていないのに、まるで自分の体の一部のようにとてもなじんだ感じがした。

「お前に戦い方を教えてやる。

時間は無いが、その剣と強い気持ちがあれば、幼なじみを助けられるかもしれない。

だが、あくまでお前の目的は幼なじみを助ける事だけだ。

余計な事には首を突っ込むなよ」

そう言うユエグスの顔は覇気に満ちた凛々しい顔ではなく、いつもの優しい顔に戻っていた。

サニィはその変化を見逃さず思わずほっとする。

「ありがとうっ！！」

完全に自分の事を認めてはくれないような言い方だったが、それでもリュウトにとっては嬉しくてたまらなかった。

生まれて初めて、自分の足で一步踏み出したような気がしたから。

(地に足を付けて生きるその先に幸せがある)

不意に神父が向かし言った言葉が脳裏に蘇る。

そうか、そう言うことだったんだ・・・。

養父さんは自分の意志で、自分の足で、自分の道を歩めって言ってたんだ。

でも、俺はその言葉の意味すら理解していなかった・・・。

リュウトは左手で、その首に下げた十字架を握った。

神父の形見の十字架は、まねで神父の手のように暖かく感じた。

今になって解った神父の自分への愛と、自分で一步を踏み出したことのうれしさに、リュウトの瞳から次から次へと涙がこぼれて止まらない。

恥ずかしさを紛らわすように、深く頭を下げる。

その様子をサニィは優しく微笑みながら見ていた。

「明日は早い、もう寝よう・・・」

そう言ってテラスを去ろうとするユエグスに、サニィも続く。

「待って・・・」

リュウトがサニィを引き留める。

「なんで、こんなに俺の事を気にかけてくれるの・・・？」

サニィは笑って答えた。

「私も戦争で大切なものを全部失ったの。

だから、他人事とは思えないんだ」

そう言うとサニィは去ろうとする。

リュウトにはそのサニィの笑顔が痛々しく思えるのと同時に、どうしようもなくリュウトの胸を高鳴らせる。

ドクン。

ドクン。

ドクン。

まるで、心臓が喉から飛び出るんじゃないかと思うほど高鳴っていた。

何なんだろう、この気持ちは・・・？

そして、サニィは去り際に言い残す。

「私の心にもずっと、止まらない風が吹いてたんだ。

でも、今は止まったよ・・・。

自分の居場所を勝ち取って、私は変わったから・・・」

そう言うサニィの背中には自分にガンバってと言っているようだった。

「ありがとう・・・」

リュウトはそう呟くと、サニィの背中が見えなくなるまで見つめていた。

サニィの持つ優しさや強さ、その内に秘めた悲しみに惹き付けられていることに、今はまだリュウトは気づいていなかった。

リュウトは誰もいなくなった水辺のテラスで、高々と夜の闇に掲げた。

暗い闇の中で僅かに光を放つ裁きの剣は、まるで光の柱のようにオアシスの水面に映ってはユラユラと揺れていた。

俺は自分の力でユツルを助けて、居場所を勝ち取るんだ・・・！！

待ってるよユツル・・・！！

必ず俺が助けるからっ・・・！！！！

あれだけ赤く大きく輝いていた満月も、何時しか普通の大きさになり、夜の闇の中で静かに美しく輝いていた。

絶望の中で希望に燃えるリュウトは、この日、夜の闇を恐れることも、悪夢を見ることもなかった。

自分が眠っているということも解らないほど深い眠りに落ち、次に気が付いたときには日の早朝だった。

そして、新たなる旅立ちの時を迎える。

宿の玄関で見送る宿の女将と大将に、リュウトは抱擁を交わしていた。

その様子をユエグスとサニィは暖かい面差しで見つめていた。

「おじさん、おばさん、俺行くよ・・・。

ここでじっと待っていても、何も変わらないって気づいたんだ。

道がなかったら、切り開いてでも進むよ。

色々と親切にしてくれて嬉しかった・・・」

女将はリュウトの体をギュッと強く抱きしめる。

「水くさいこと言わないよ！

私たちはアンタの事、本当の子供のように思ってたんだから・・・！」

女将はその大きな体を震わせて、涙を堪えていた。

そして、リュウトを離す。

「また、来いよ・・・！

こんどはユツルちゃんを連れて・・・！！」

そう言う大将にリュウトは大きな声で答えた。

「絶対にまた来るよっ！！

ありがとうっ！！」

リュウトの目から涙がこぼれる。

リュウトはその顔を見せないように、女将と大将に背中を向けて、力強く歩み始めた。

「行こうっ・・・！」

とリュウトは噛み締めるように言った。

ど、何処に行くんだろう・・・？

リュウトはたまらなく不安になっていた。

何故なら、ヤゴン川の方に向かうには、メインストリートをおアシス方面に向かわなければならないのに、ユエグスは二人を連れて、反対側の街の出入り口の方へと向かっていたから。

もともと、地下水路道は先日の崖崩れで通行止めだが。

早朝の開店前で、水路の流れる音が聞こえるくらい静まりかえった街並みが、不安さを助長させる。

「何処に行くの・・・？」

さすがに何も聞かずに居られず、リュウトは口を開いた。

「まあ、付いて来れば解るさ」

しばらく黙って付いていくと、メインストリートの真ん中あたりで細い路地に入り、水路が流れ込む公園の中へと入っていった。

「ここだ」

とユエグスは言った。

公園の中は砂漠の街にも関わらず、植林された豊かな緑で覆われて、水路の水が溜められた小さな池もあり、さながら小さな森の中の広場のように思えた。

木々の葉を濡らす朝露が、朝日を浴びてキラキラと光っていた。

砂漠の朝の乾燥した空気の臭いから一転して、リュウトが生まれ育ったアナマ村のような澄んだ空気の臭いになった。

何度もケイ口に来たことのあるリュウトでも、大通りのお店ばかりに気を取られていた為か、こんな細い路地に入った所にこんな公園があるなんて知らなかった。

でも、旅には何ら関係は無い・・・。

一体なんなんだ・・・？

「これって、昨日の公園じゃない・・・？」

「そうだよ」

さすがに何の関連性も見いだせないで聞くサニィに、ユエグスは笑顔で返した。

辺りを見渡し誰もいないことを確認すると、ユエグスは二人を連れて、緑生い茂る林の中に入ってしまった。

木々に囲まれ外から全く見えない位置にあったのは、ボロボロになった木製の蓋で塞がれた古井戸だった。

その蓋の上には世界神の印が刻まれた札が張ってあった。

「ぎょっ！」

それを見てリュウトは鳥肌が立った。

「もしかして、あの噂の井戸じゃないか・・・？」

リュウトは身を背筋を凍らせる。

「噂って・・・？」

サニィが聞く。

「結構有名な話だよ・・・。

昔、ケイロが水不足に悩んでいたとき、水脈を探して幾つもの穴を掘ったんだ・・・。

その中の一つが魔界に通じてしまって、そこから悪魔が出てきて、結局、帝都から来た偉い魔導師が、お札を張って封印したんだ・・・。

普通じゃ絶対破けないような封印だけど、万が封印が破れて一蓋を開けてしまったら、開けた人は魔界に魂を吸われて死んでしまうと言われていた・・・。

単なる噂だと思っていたけど、実際にあるとは・・・」

これはやばいんじゃないか・・・？

出来ればこんな所さっさとおさらばしたい。

リュウトが恐怖に身を震わせる中、ユエグスは平然と蓋を開けていた。

「うわっ！！

蓋開いてるしっ！！！」

ドキッと心臓が跳ね上がり、とっさに目を覆うリュウト。

しばらくの沈黙。

だが、一向に何かが起こる気配はない。

恐る恐る目を覆った手を離すと、ユエグスは別に何ともなっていないかった。

「し、死んでない・・・」

リュウトが安心したように胸をなで下ろす。

「そりゃそうだ。

その話は単なるデマだし」

サニィは笑う。

「そうだと思った。

だって、魔界に繋がっているような、邪悪な感じはしなかったし。

リュウトったら必要以上に怯えているんだもん。

「恐がりなのね」

リュウトはサニィに笑われてムツとする。

役場でも魔物に怯えて格好悪い所を見られたし。

俺ってサニィに臆病者だと思われているかも・・・。

なんとか、イメージを挽回したい。

ユエグスは井戸にかけられた梯子を降りて行く。

よしっ、ここは一つ堂々と入って、格好いいところ見せないよ・・・！

「俺は全然怖くなんか無いぞっ！！」

と口では言って置きながら、体をブルブルと震わせるリュウトは、臆病者以外の何者でもなかった。

結果、臆病者だという事を、余計にサニィに印象付けてしまったことに、リュウトは気づいて

いなかった。

ついつい、そんなリュウトを見て笑ってしまうサニィ。

本当に死んだ弟みたいで、なんだか可愛いくてほっとけないと思った。

リュウトに続いてサニィが井戸に入ろうとすると、林の中で朝の用を足そうとしていたジュース売りの男に気づかれてしまう。

「ん・・・？」

そこに誰かいるべか・・・？」

社会の窓全快で辺りを見渡すジュース売りの男。

「きゃっ！！」

サニィの位置からは丸見えだった。

思わず悲鳴を上げてしまい、やばいと思って急いで井戸の中へと入り込んだ。

すると、魔法がかけられている為、自動的に封印の蓋が閉まる。

「たしかに、今、悲鳴が聞こえて、そこに白い服の女がいたと思ったんだべが・・・」

ジュース売りの男が古井戸の近くまで来て、周囲を見渡しても人っ子一人いなかった。

そして、不意に下を見ると、そこには封印が施された古井戸があった。

「こ、これはあの噂の井戸じゃねえべかっ！！

するってえと、さっきの女は井戸に魂抜かれて消えちまったんか！！！

ひっひい————っ！！！」

幼い頃からその存在を噂に聞いて育った男にとって、それは何よりも恐怖だった。

男は失禁しながら悲鳴を上げて逃げていった。

サニィが蓋が閉まり真っ暗になった井戸の縦穴を下りきると、そこは広い空間を持つ岩盤むき出しの洞窟だった。

苔が生えた壁に、真鍮細工のステーで固定された水晶玉が魔力を放ち、ぼんやりと光って濡らめく洞窟を照らしていた。

ポチャン、ポチャンと常に何処かから水が滴り落ちる音が響き、さぁーっと水が流れるも遠くから聞こえた。

一足早く到着していたリュウトは、洞窟の空気の冷たさに身を震わせていた。

洞窟の中は砂漠の温度からすればかなり冷えていたが、サニィが身にまとった白いシャツや、サラシの魔法の効果により寒いとも感じなかった。

サニィはユエグスに聞く。

「今、ジュース売りのおじさんに見られちゃったけど、大丈夫かな・・・？」

サニィが聞くと、ユエグスは笑って答えた。

「たぶん、魂を抜かれてサニィが消えてしまったと思ってるだろう。

先入観は正しい判断能力を奪い、事実を闇の中に隠してしまう。

特にそれが恐怖に関することならなおさらだ。

その話は誰かがこの井戸の真実を、人々の目から逸らす為に流したんだ。

万一出入りしている所を見られても、悪魔が出てきたと思われたり、魂を抜かれて消えてしま

ったと思われるから、その恐怖で本当の事は解らなくなるだろ。

人間はなかなか先入観を断ち切ったり、恐怖を克服する事は出来ないが、惑わされず一步踏み込んで見れば確信に迫れる事もある」

ままと、自分も騙されていたわけだ。

「じゃあ、誰が何を隠したかったの・・・？」

と寒さに震えながらリュウトが聞く。

「まあ、いずれ解るさ・・・。

とりあえず、先へ進もう。

歩いていけば、体も温まるだろう」

洞窟は大凡一本道だが、左右に大きくうねっており、高低差も多いため、あれだけ寒かったにもかかわらず、リュウトの体は湯気を放つほど暖まった。

途中、もの凄い勢いで轟音を上げながら流れる地下水脈の横を通ったり、鉄で出来た橋で水脈を反対側に渡ったりしながら三人は進んでいく。

あの水晶玉の放つ魔力のためか、魔物は一切現れはしなかった。

そして、辿り着いた先は行き止まりで、岩盤には大きな鉄の扉が取り付けられていた。

洞窟の広い空洞と同じぐらいの大きさの扉で、とても人間の力で開けるとは思えないぐらい巨大だった。

ユエグスは無言のまま鉄の扉へと手をかざす。

ゆっくりと、ゆっくりと。

その様子を息を飲んで見つめるサニィとリュウト。

そして、完全に触れたと思うと、ユエグスの触れたところから光が走り、扉の表面を駆けめぐって、円に囲まれた世界神の紋章を描き出す。

そして、ゴゴゴゴゴゴと、地鳴りのような音を伴って、あの大きな扉が開いていく。

完全に開ききると、その扉の向こう側が明らかになった。

とても洞窟の中とは思えないような明るい空間だった。

ドーム状の天井が発光し、その空間を明るく照らしているのだ。

サニィとリュウトはドームの中で辺りを見渡した。

真ん中に設置された立派な椅子を囲むように、規律正しく机や、無線機や操作盤、モニターなど様々な機材が並べられている。

真正面には、昇目の敷かれた巨大なモニターが設置されていた。

それはまるでTVの映画に出てくる軍の司令基地のようだった。

まさか、本当に・・・？

リュウトが中央の椅子に手をかけると、その背もたれの部分には帝国の象徴である世界神の紋章が刻まれていた。

よく見れば、椅子やモニター、機材など、至る所に同様の紋章が刻まれていた。

「じゃあ、ここは・・・」

リュウトが確かめるように聞くと、ユエグスは頷いた。

「ああ、ここは帝国軍の臨時司令室だ。

この洞窟は帝国の要人用の緊急避難通路として利用され、臨時司令室の他にシェルターや保存食の倉庫など、非常時の為の施設が揃っている。

だから、他の洞窟が崩れても、ここだけは崩れないだけの強度を持っているんだ」

「そうか、井戸のうわさ話は、人の目からこの洞窟の真実を隠すためのものだったんだ・・・」

リュウトが言う。

そこまでして隠す必要のある重要な場所。

それは帝国の最後の砦と言っても過言ではない場所で、最重要機密である事はサニィにも解った。

いくら、ユエグスが博学と言っても、普通の人なら絶対に知る由もない。

何で、そんな事を知っているの・・・？

サニィはじっと、ユエグスの横顔を見つめていた。

とても、切ない表情を浮かべながら。

私、ユエグスの事を何も知らないんだ・・・。

そもそも、たまたま出会っただけで、私と一緒にいる理由が解らない・・・。

でも、本当のことを知ってしまうのが怖かった・・・。

知ってしまえば、もう一緒に居られないような気がしたから・・・。

不意に目に溜まった涙を堪えるように上を見上げると、発光するドーム型の天井は美しい模様のスタンドガラスのようになっていて、そこに幻想的な絵が描かれていること事に気が付いた。

額に見開かれた第三の目、重力を持たないように縦横無尽に広がった金色の長髪、背中に不思議な模様の金色の輪を持った人ではない者と、その者に抱かれた地球の中に、まるで十字架のような形状の剣を手にした、金髪の青年が描かれていた。

その絵は何故かサニィの心を掴んで離さなかった。

無言のまま天井を眺めるサニィの背中をリュウトは見つめていた。

リュウトは、サニィが切ない表情でユエグスを見つめ、涙を浮かべている事に気が付いていた

。

なんで、サニィがそんなに切なさを抱きながら、ユエグスを思っていたかなんて、リュウトには解らない。

ただ、一つ解ることはユエグスがサニィを悲しませていると言う事だった。

「まだ道は長い、先を急ごう・・・」

ユエグスがそう言って司令室のモニターの裏にある反対側の扉を同様にして開くと、再び薄暗い洞窟の道を歩み始めた。

すでに地下水脈は近くを流れてはおらず、ただ湿った岩壁が見えるだけの単調な風景が続き、日も射さない洞窟の中ではどれだけの時間、どれだけの距離を歩いたかはすでに解らなくなっていた。

サニィは先頭を歩くユエグスの背中を見つめながら、リュウトは前を歩くサニィの背中を見つめながらそれぞれの思いに耽りながら歩き続けていた。

そして、やがて洞窟の道が上り坂になってきた頃、サニィが沈黙を破る。

「ずっと、あのドームの天井の絵が気になってしょうがないの」

そう言うサニィに、リュウトは待ってましたと言わんばかりに勢いよく口を開いた。

ずっと、サニィには格好悪いところを見せっぱなしだったし、少しは良いところを見せたいと思っていた所だった。

「ああ、世界神と初代皇帝ミルザ・ウェー・マハラードの絵だね」

世界神と、皇帝・・・？

あれが・・・。

あれだけ憎しみ、敵視していたはずのその二つの名前だが、あの絵はそんなに嫌な感じに思えなかった。

むしろ、その逆の感情を抱いていた。

何処か悲しげで、とても力強く、優しい雰囲気満ちた二つの偶像。

それはサニィの心に居着いて離れないあの人の雰囲気に重なっていたから・・・。

サニィはユエグスの背中をじっと見た。

サニィの気を惹き付けて止まないユエグスへの対抗意識もあって、リュウトは得意げに話す。

「世界神は唯一の絶対神であり、全ての創造主なんだ。

始めに世界神がこの世界を作ったときに、始めの人間として二十一人の眷族を作り、その二十一人を導くことで世の中を動かしているんだ。

以前は世界中にもっとたくさんの宗教があって、食い違う神話から互いの正当性を主張する世界規模の戦争が起きたんだ。

そして三百年前、戦争の悲しみを終わらす為に、世界神の血を引く英雄、初代皇帝ミルザ・ウェー・マハラードが戦争の原因になる邪教や、それを崇拝する国を統一して帝国を作ったんだ。

家が教会だったから、毎日しつこいぐらい聞かされていたよ」

今まで黙って聞いていたユエグスは苦笑する。

「まあ、その歴史は、多少脚色されているものの、おおよそ真実だ。

だが、神話だけは真に受けない方が良い。

今でこそ、世界神が唯一神で、二十一の眷族を含めて、全ての創造主だと言われているが、統一戦争前に存在した数多くの宗教の中で、世界神と同じルーツをたどる宗教には、元来、二十二の神がいることになっている。

しかも、その宗教によれば世界神を含めた二十一の神は、本当の創造神によって作られたと言われている。

その宗教では、決して世界神は創造主なんかじゃないんだ」

ユエグスの話にリュウトは思わずムツとする。

自分の知識を否定されるだけではなく、それを教えた神父の存在をも否定されたような気がしたからだ。

「それは、反帝国軍や他のテロ組織の作り出した邪教でしょ・・・？

帝国が不利になるような邪教を宣教し、帝国の転覆を狙っているって。

TVでも言ってたし、教会宛に来る会報にもそう書いてあった。

祈りの言葉にもあるよ。

邪教に絶対に騙されるなって」

感情を抑えて言ったつもりが、その声はべそをかいた子供のように曇ってた。

ユエグスはそんなリュウトにお構いなしに話を続ける。

自分を虚栄する為の甘さや情けは人を傷つけるだけだ。

「それは全て帝国が流した情報だろ？」

自分の目で確かめた訳じゃないのに、それが真実と言えるのだろうか。

全ての宗教的神話は雲の上の話なので、想像することが出来ても、見る事が出来ないの、
なにが真実とは言えないはずだ。

全ての宗教に共通することは、この地上を楽園と思い幸せに生きるための、価値観だと言うことだ。

だが、その意味も考えず、与えられた価値観や情報を無条件に受け入れていけば、真実はわかりはしない。

大切なのは与えられたモノをそのまま飲み込むのではなく、自分の目で見て考える事により、それを噛み砕いて意味を知ることだ。

お前も旅の中で与えられた価値観から一度離れ、自分の目で世界を見た方が良い。

そして、得たものがお前の真実となるだろう」

それは小さな自分を諭しているようで、無性に腹が立った。

しかも、今まで自分が信じてきた神を真実では無いと言い放つユエグスが、人間では無いように思えた。

リュウトはふと、ユエグスに裁きの剣を手渡した時の気持ちを思い出す。

あるモノと取引をしてしまったような後悔。

それは、世界神の子が忌み嫌う存在。

すなわち、悪魔……。

世界神の教えでは、神を信じる事が出来ず、楽園を追放され墮落した者は、悪魔になってしまうと言う。

自ら墮落し、自分やサニィをも墮落への道に誘うユエグスは悪魔そのものの様に思えた。

悪魔は許せない……！

リュウトはユエグスに対する思いの正体を知った。

俺はユエグスが嫌いなんだ……！

「だが、誰もがその宗教と帝国を信じる事により、世界の均衡が保たれているのも事実だ。

これだけ沢山の人種や国が存在するこの世界において、小さな戦争はあっても世界規模の戦争に発展しないのは、世界中が一つの神……宗教を信じ、さらに神の血を引く者である帝王と言うカリスマが存在するからだ。

それに加えて帝国が誇る強力な軍事力の驚異もあるが、どんな軍事力も民衆が一丸となった力

にはかなわず、万一世界中の人間が帝王が神の子ではないと思ったら、あつと言う間に帝国は滅び、世界は再び戦乱の世に陥るだろう。

そう、疑えば消えてしまう楽園・・・、それが帝国なんだ。

だから、帝国はその神話の正当性を守るために力を使う。

二十二神の他の神の血を引く者を、自らの眷族としてその家系に取り込み、協力しない他の神の血族は虐殺したり去勢して根絶やしにしたり、都合の悪い宗教を邪教として、それを崇拝する国を戦争で壊滅させる。

その憎しみが憎しみを呼び、テロや戦争が繰り返され、悲しみは決して終わらない。

俺達がこうしている間にも悲しみが生まれ続けている。

それが現実には起きている」

「酷い・・・。

酷いね・・・」

サニィのいた世界も、この世界も、戦争が悲しみを生むことに変わりはない。

全ての悲しみを終わらしたい・・・。

サニィは悲しみの中で帝王への憎しみを募らせる。

「ああ、犠牲と引き替えに手に入れる平和は決して正しいとは言えない。

一人殺せば殺人者、千人殺せば英雄と言われるが、その罪に変わりはないと思う。

罪を犯した帝王は罰せられるべきなのかもしれない。

だが、それが罪だと知っていても、帝王は止まることが出来ないんだ。

国という大きな仕組みの中では、帝王ですら歯車の一つでしかないから。

近づけば近づくほど、その大きさに形すら見えず、どうしたら良いかなど解らない」

心なしか重苦しく感じるユエグスの言葉。

それでも、私は帝王を殺すしかない・・・。

全ての罪に罰を・・・！！

全ての悲しみに終焉を・・・！！

そう、脳裏に焼き付いた弟の死に顔が、僅かに残る記憶の断片が叫ぶから・・・。

だから、少しの希望でも、それにすがりしか無いのに・・・。

なのに、何でそんな事を言うの・・・？

やっぱり、帝国と関係があるから・・・？

だから帝国と・・・、帝王と戦うことを快く思っていないの・・・？

もう、一緒にはいられなくなってしまうの・・・？

リュウトは悲しみに肩を落とすサニィの変化を見逃さない。

まただ！！

また、ユエグスはサニィを悲しませている・・・！！

サニィを悲しませる悪魔め！！

許せない・・・！

リュウトが何か言おうとしたとき、ユエグスは突然足を止める。

その見つめる先・・・、洞窟の壁面には金属でできた梯子がかかっていた。

まだまだ、洞窟の道は遙か彼方まで延々と続いていたが、歩くのはどうやらここまでのようだ

。 タイミングを逃したリュウトは何も言うことが出来なかった。

ユエグス、サニィ、リュウトと続き、梯子を登っていく。

湿気で表面が塗れているので、足下が滑らないように注意しながら上っていくと、上に行くに従って辺りが明るくなって来る。

冷え切った空気も徐々に暖かくなっていくのも解った。

梯子を登りきったところは急な斜面の横穴だった。

そして、前方にぽっかりと空いて見える穴から、まぶしい光が射し込んでいる。

ずっと、地下にいた三人にとって、その光はまぶしすぎて、まるで目に突き刺さるように痛く感じたけど、何故だかとても嬉しく感じた。

湿って滑る岩の斜面を両手を使って這い上がって、穴の向こうの光へと飛び込むと、一瞬何もかも真っ白で何も見えなかった。

世界は一転し、そこは柔らかい木漏れ日が射し込む森の中だった。

振り返ると、岩盤むき出しの崖にぽっかりと洞窟が口を開いている。

森の中から見ると洞窟の中はとても暗く、光の中でそこだけが闇に覆われているに思えた。

そして、洞窟には世界神の札を吊した注連縄が張り巡らされ、やはり結界が張られているようだった。

まるで、本当に地獄に続いているようなゾッとする風景。

腐葉土のサクサクとした地面が、硬い岩の地面で痛くなった足の痛みを和らげる。

サニィは大きく深呼吸しながら腕を伸ばす。

「気持ち良いっー！！」

太陽の暖かさ、森林の臭いがとても気持ち良かった。

あれだけ悩んでいた気持ちも、太陽の光の中で少し楽になった気がした。

ウジウジ気にしててもしょうがないよね・・・！

「やっぱり、地上が一番ね！！」

木々の間から差し込む日の光が相変わらずまぶしくて、サニィの白く美しい顔がより一層輝いて見えた。

ユエグスはサニィに微笑んだ。

そして、間を空けて言う。

「サニィはいつも言っているだろ・・・？」

全ての悲しみを終わらしたいって。

俺もその気持ちは同じだよ。

だから、その為にどうすればいいのか、旅の中で答えを探し続けたけど、まだ見つからない」

そして、ユエグスは聞こえるか、聞こえないか解らないぐらいの声で呟く。

「でも、君と歩むこの道の向こうに何か解る気がするんだ・・・。

こんなにも、まぶしく光が射しているから・・・。

だから、一緒に歩き続けよう・・・」

だけど、サニィはその声を聞き逃さず聞いていた。

それは初めて聞いたユエグスの本当の気持ち。

照れを隠すように背中を向けるユエグスにサニィは自然に微笑んでいた。

なんだ、結局ユエグスも私と同じ気持ちだったんだ・・・！

そうだよね・・・！

どんな秘密を持っていても、ユエグスはユエグスだよね・・・！

そんなこと解っていたはずなのに、何で私心配してたんだろう・・・！

「行こう！！」

サニィは両腕を振り上げ歩き出した。

その顔はとても嬉しそうで、まるで太陽のようにまぶしくかった。

サニィから悲しみが消えて、リュウトは思わずホッとして、その笑顔に惹き付けられたが、それと同時にサニィの気持ちを惑わして、惹き付ける悪魔のようなユエグスが許せなかった。

そして、三人は木漏れ日射す森の中を崖に沿って歩き始めた。

後書き

まだ十代だった頃に書き始めた未完のファンタジー小説ですが、現在書いているSoma x Soma審判とキャラクターの構成や雰囲気似ていて、ある意味で原型と呼べるような作品だと思って掘り返してみました。

周囲からの評価は高かったのですが、その理由は躊躇いを持たずに感情の赴くまま文章を綴っていたからかも知れません。

今の淡々としたドライな作風からすると信じられないぐらいですね。

世界「～Verden」

<http://p.booklog.jp/book/75943>

著者：ゆうすけ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yusuke-e256/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75943>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75943>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ